荒神山おんまわし遺跡II

緊急地方道整備事業与地－辰野線改修
事業に伴う緊急発掘調査報告書

1990

長野県辰野町教育委員会

諏訪湖
辰野町
天竜川

序

荒神山おんまわし遺跡は平成元年、圃場整備事業に先立って調査が実施され、数多くの方形周溝墓や、平安時代の集落址の発見など大変貴重な成果をあげております。今回県道与地辰野線の改良事業が施行されるにあたり、伊那建設事務所の委託をうけて町教育委員会が主体となり、調査を実施いたしました。

その結果、平安時代の住居址をはじめ、弥生時代の住居址、方形周溝墓など期待どおりの成果をあげることができました。

樋口区はここ数年大規模な開発が行われ、この荒神山おんまわし遺跡をはじめ、多くの貴重な遺跡が姿を消しつつあります。埋蔵文化財は一度破壊すると二度と元にもどらないものであり、その意味でも調査報告書は大変重要な記録書であるといえます。この重要な調査報告書の上梓をよい機会として埋蔵文化財保護に御協力いただきますようお願い申し上げます。

この度の本書作成にあたり、伊那建設事務所、長野県教育委員会文化課、地元の方々をはじめ、直接調査に従事された調査団の皆様、さらに遺物整理、報告書作成にご尽力くださった多くの方々に深く感謝申し上げます。

平成3年3月

辰野町教育委員会

教育長　小　林　晃　一

例　　言

1．本書は長野県上伊那郡辰野町樋口2．222-3番地に所在する荒神山（こうじんやま）おんまわし遺跡の第２次発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、伊那建設事務所所長小池義幸と辰野町教育委員会教育長小林晃一との委託契約に基づいて行われた。なお発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。

3．発掘調査は平成２年12月25日から平成３年１月30日まで現場作業を実施し、出土遺物の整理及び報告書の作成は平成３年１月21日から３月25日まで辰野町教育委員会において行った。

4．発掘調査現場における記録は福島永が担当し、遺構等の実測図作成は福島、大森淑子が主として行った。また本書の作成は福島が当たり、遺物等の実測図の作成は大槻直子、大森淑子、佐藤直子、白鳥栄子が行い、土器復元は福沢幸一氏にお願いした。

5．遺構の番号については第１次調査からの通し番号とした。

発掘調査関係者名簿

1．荒神山おんまわし遺跡発掘調査団

調査団長　友野良一（考古学研究者　宮田村）発掘担当者

調査員　福島永（辰野町教育委員会社会教育課　文化係）

発掘調査協力者　板倉たせ子・大森淑子・長田作衛・垣内論・桑沢とよ子・城倉けさみ・中谷あき子

整理作業協力者　宇治ひろゑ・大槻直子・大森淑子・工藤信子・佐藤直子・白鳥栄子・田畑三千代・村上茂子・福沢幸一

2．辰野町教育委員会事務局

教育長　小林晃一

社会教育課長　三浦正義

文化係長　平泉栄一

文化係　福島永

目　次

序
例　言
第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1
　第１節　保護協議の経過 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 5
第Ⅲ章　発掘調査 …… 9
　第１節　発掘調査の概要 …… 9
　第２節　遺跡の層序 …… 9
第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 13
　第１節　弥生時代の遺構と遺物 …… 13
　　第30号住居址／第48号住居址／第15号方形周溝墓
　第２節　平安時代の遺構と遺物 …… 20
　　第46・47号住居址／第49号・50号住居址
　第３節　その他の遺構と遺物 …… 23
　　第１号溝状遺構／土坑
　第４節　遺構外出土の遺物 …… 26
　　縄文土器／石器／陶磁器
第Ⅴ章　結　語 …… 34

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図及び調査区位置図　2
第２図　荒神山のテフラ柱状図　3
第３図　辰野町段丘面区分図　4
第４図　周辺遺跡分布図　6
第５図　樋口区周辺の弥生時代遺跡　8
第６図　調査区土層断面図　10
第７図　荒神山おんまわし遺跡
（第２次調査）遺構平面図　11
第８図　第30号住居址出土遺物(1)　13
第９図　第30号住居址実測図　14
第10図　第30号住居址出土遺物(2)　15
第11図　第48号住居址実測図(1)　16
第12図　第48号住居址実測図(2)　17
第13図　第48号住居址出土遺物　18
第14図　第15号方形周溝墓実測図　19
第15図　第46・47号住居址実測図　20
第16図　第46・47号住居址出土遺物　21
第17図　第49・50号住居址出土遺物　21
第18図　第49・50号住居址出土遺物　22
第19図　第１号溝状遺構実測図及び遺物　23
第20図　土坑実測図（1）　24
第21図　土坑実測図（2）　25
第22図　縄文土器拓影図(1)　26
第23図　縄文土器拓影図(2)　27
第24図　縄文時代石器実測図(1)　28
第25図　縄文時代石器実測図(2)　29
第26図　縄文時代石器実測図(3)　30
第27図　縄文時代石器実測図(4)　31
第28図　縄文時代石器実測図(5)　32
第29図　陶磁器実測図　33

写真図版目次

図版１　遺跡全体写真
図版２　第30号住居址
図版３　第48号住居址
図版４　第15号周溝墓／第46・47号住居址
図版５　第49・50号住居址／第１号溝状遺構
図版６　土坑
図版７　第30号住居址出土遺物
図版８　第48号住居址出土遺物
図版９　第49号・50号住居址出土遺物
図版10　第46号住居址出土遺物／遺構外出土遺物
図版11　遺構外出土遺物
図版12　遺構外出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　保護協議の経過

荒神山おんまわし遺跡は昭和初期に区画整理を実施した際に土師器皿・甕等が多数出土し、遺跡として確認されていた。

平成元年には団体営圃場整備事業に先立っての緊急発掘調査によって平安時代の集落、弥生時代の集落をはじめ、弥生時代と思われる方形周溝墓や縄文時代早期の押型文等、貴重な成果をあげた。なかでも第３号周溝墓からは鉄鏃が破片として出土しており、県下でも貴重な資料を提供している。

この圃場整備の実施された平成元年５月に伊那建設事務所より県道与地－辰野線の改修事業に伴って当該遺跡が開発対象となる旨の連絡をうけた。しかし事業の開始期間が明確ではなかったため、期間がある程度判明してから改めて保護協議を実施することとした。

平成２年10月になり平成３年度の県道改修事業に関する埋蔵文化財の保護協議において、県道与地－辰野線の改修事業を実施する事が判明したため、平成３年５月に改めて辰野町教育委員会と伊那建設事務所の二者によって保護協議を行い、平成２年度工事施工箇所のみを当該年度で調査を実施する事を決定し、同年12月７日に伊那建設事務所長小池義幸と辰野町教育委員会教育長小林晃一との間で委託契約を締結し、辰野町教育委員会が発掘調査を実施した。

第２節　発掘調査の経過

（調査日誌より）

平成２年

12月24日　重機による表土剥ぎを行う。

12月25日　遺構検出作業開始。

平成３年

1月 7日　住居址を確認、掘り下げを始める。

1月10日　30・48号住居址を掘り下げ、写真及び実測を行う。

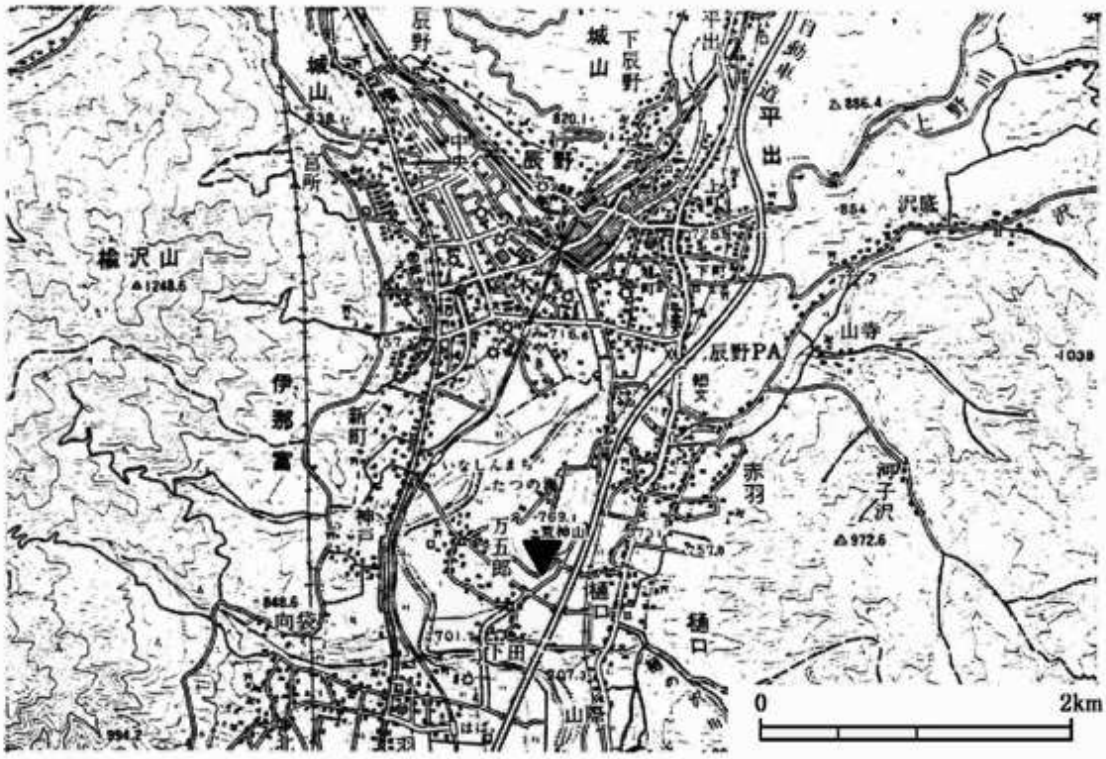
1月14日　周溝墓の掘り下げを始める。主体部は確認できなかった。

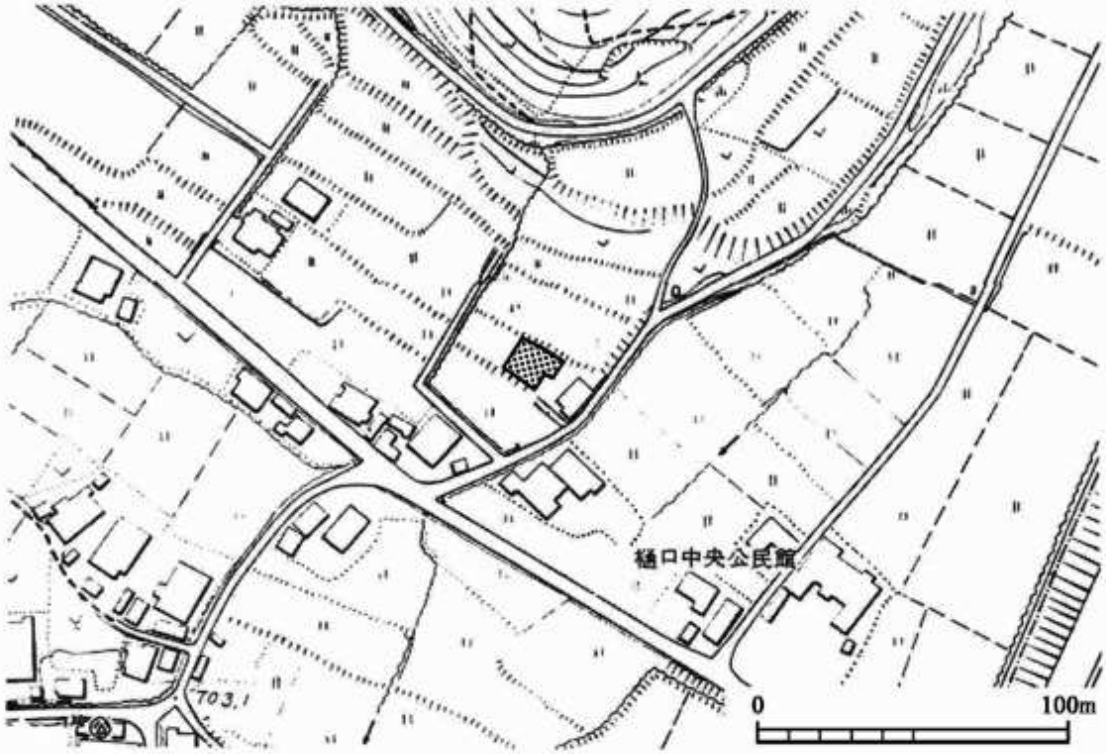
1月16日　周溝墓を掘り下げ、土坑の調査を始める。

1月19日　各遺構の平面図作成。

1月23日　全体写真の撮影。

1月30日　機材の撤収。





第1図　遺跡位置図及び調査区位置図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

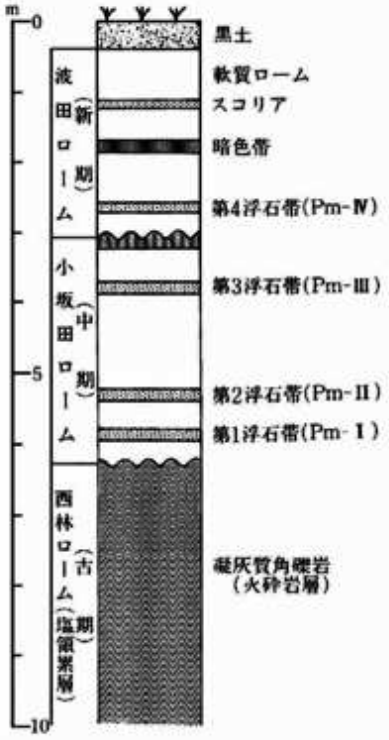
第１節　地理的環境

辰野町は南北約70kmの伊那盆地の最北端に位置しており、西は木曽山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる山塊が占め、東部は伊那山脈の北端部がのびている。伊那山脈は沢底川を境にして南部は小式城山塊、北部は東山丘陵と呼ばれており、この東山丘陵は辰野地域の山地の中で最もなだらかな丘陵地帯である。また、町平坦部のほぼ中央に位置する火山砕屑層上に古期から新期ロームをのせた残丘である荒神山の東西両地域は河川による氾濫原であり、荒神山の南側では６段の河岸段丘が形成されている。

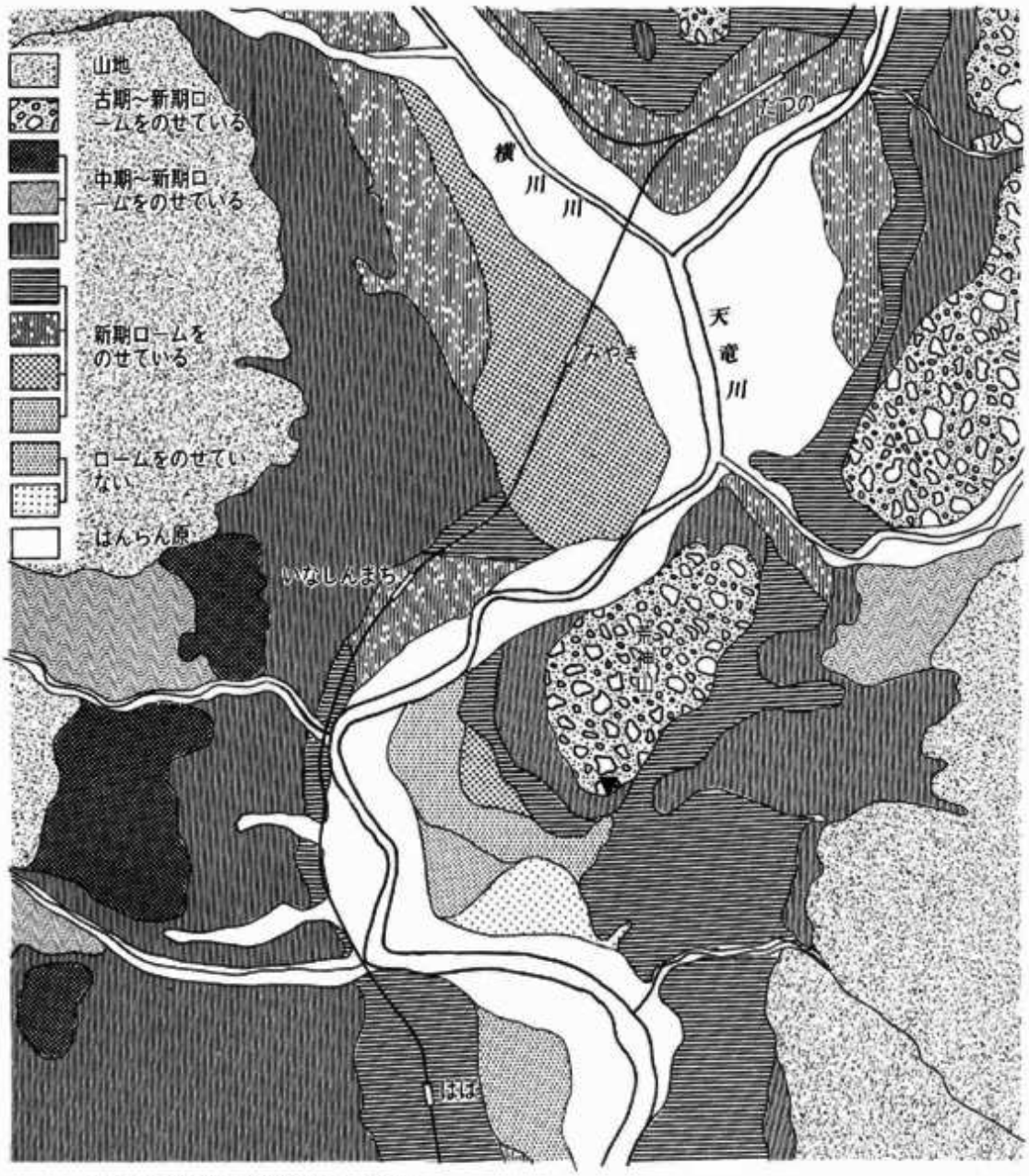
一方、荒神山東側一帯は、板橋川に代表されるような天竜川に注ぎ込む支流によって氾濫原や湿地帯が形成された。これは平成元年度に実施された試掘調査によっても明らかにされたが、荒神山の東側裾は支流の氾濫原として河床礫が表土直下より出土し、さらに東側には一部微高地形を南部に残しながら広大な粘質土層が確認され、葦の根等も検出していることからも湿地帯であったと考えることができる。そしてこのような湿地帯を経て天竜川の氾濫原へと連なっていくのである。

このような広大な湿地を背景にして荒神山おんまわし遺跡は推定面積およそ７haであり、樋口内城、樋口五反田両遺跡と同様の規模で、いわゆる低位段丘を中心に展開している。遺跡の広がる段丘は樋口五反田遺跡と同位段丘で、いわゆるＫＳ－２木下段丘２とＫＳ－３木下段丘３または下田ａ面と呼ばれるものに相当すると考えられる。そしてこの段丘に加え、荒神山南裾の傾斜面をも一部含んでいるものと思われる。ＫＳ－２は最上部の新期テフラをうすくのせている段丘面であり、ＫＳ－３は風成テフラを全くのせていない段丘面である。このＫＳ－３については荒神山おんまわし遺跡において黒土層直下に河床礫が出土しており、テフラをのせていないことが確認された。

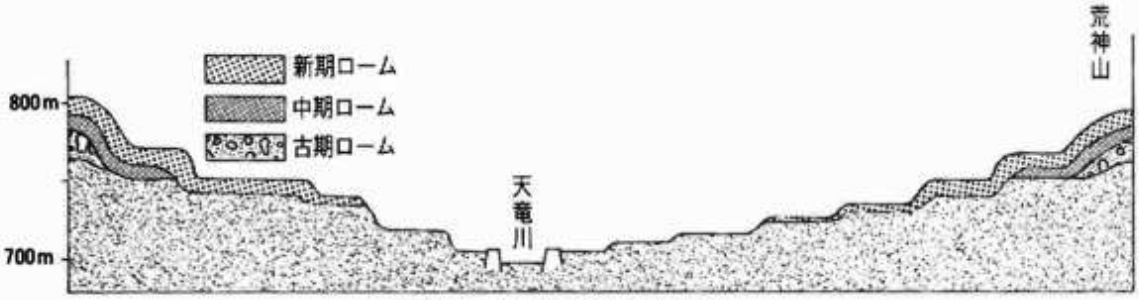
なおＡＴ火山灰は伊那市伊那東部中学校露頭及び飯田市石子原遺跡で確認されており、辰野町内でも新町槲林遺跡において初めて確認された。



第２図 荒神山のローム層
〔原図：清水1962〕



▼印は荒神山おんまわし遺跡



第3図 辰野町段丘面区分図

第２節　歴史的な環境

荒神山おんまわし遺跡の存在する辰野町樋口地区は町内でも有数の遺跡密集地である。特に弥生時代の遺跡は今回調査した荒神山おんまわし遺跡をはじめ、昭和47年・48年と中央自動車道建設事業および圃場整備事業に先立って調査が実施された樋口五反田遺跡や、その北東に位置する樋口内城遺跡等が挙げられる。

樋口五反田遺跡は、前述のように中央自動車道建設事業および圃場整備事業に先立ち発掘調査が行われ、縄文時代では中期住居址８基、後期前半加曽利Ｂ式土器と土偶、晩期後半氷式土器を伴う配石墓16基等が出土し、配石墓内からは火熱をうけた鹿角片が出土している。また弥生時代後期の遺構として24基の住居址のほか、時期を前後して２基の方形周溝墓が発見されている。またＣ16号住居址からは0．3㌘ほどの炭化米が出土し、石庖丁の出土とともに米作りとの関係が注目された。一方Ｃ４号、Ｃ16号住居址の炉内からは、火熱をうけたシカ、イノシシ、カモシカ、シバイヌの骨片が出土している。ほかにも古墳時代の住居址１基が出土している。また、この一帯の地名は江戸時代元禄３年（1690年）の検地帳に「五反田」、「八た田」、「村前」、「山きわ」「矢沢」、「窪畑」などが見え、農地の開発は古くから行われていたらしく、昭和63年の調査でも新旧３枚の水田面が確認された。

荒神社矢沢遺跡は樋口五反田遺跡と樋口内城遺跡の間にあり、中央自動車道建設事業の際発掘調査され、縄文時代中期の４基の住居址が出土したが、この内新樋線よりの３基は地形的にも時期的にも樋口五反田遺跡に含まれると考えられる。なお、調査時の所見として、遺跡内の土層は灰褐色粘質土が厚く堆積していたり、腐植質の粘質土があったりして、湿地帯の特徴をよく示していたという興味ある報告がある。

樋口内城遺跡は矢沢原の扇状地から西へ続く舌状の段丘上にあり、中央自動車道建設、圃場整備事業に先立って発掘調査が行われ、縄文時代から中世に至る各時代の遺構、遺物が多量に出土した。縄文時代中期の住居址57基、同土坑85基、弥生時代の住居址66基が発掘され、これらの時代の代表的な集落として、その構造が明らかとなった。特に弥生時代５号住居址出土の炭化ムギの存在は樋口五反田遺跡の炭化米と対象的である。さらに古墳時代の住居址２基・平安時代の住居址８基も出土した。

そのほかにも中世末期の城館跡と考えられる遺構・遺物も出土している。

荒神山おんまわし遺跡は板橋川をはさんで五反田遺跡の西側段丘上に広がる大きな遺跡で、昭和初期の区画整理事業では平安時代末期の土師器坏数点が採集されており、平成元年度の圃場整備事業に伴う発掘調査では平安時代末期の住居址28基をはじめ、弥生時代の住居址７基、周溝墓14基が出土している。なかでも平安時代の住居址である11号居住址と18号居住址からは、ほぼ完形の鉄製紡錘車が出土したのをはじめ、25号住居址からは鍛先も出土している。また、この本調査に先立って行われた試掘調査では、平安時代後半期の小鍛冶遺構も確認されている。さらに荒

181
217
178
176
197
184
183
172
185
186
188
180
193
192
179
198
0
500m

第4図　周辺遺跡分布図

神山南裾付近では遺構外ではあるものの表裏縄文の土器片が数点出土し、黒曜石のブロックを伴う集石群内で押型文、条痕文の土器片が多量に出土している。

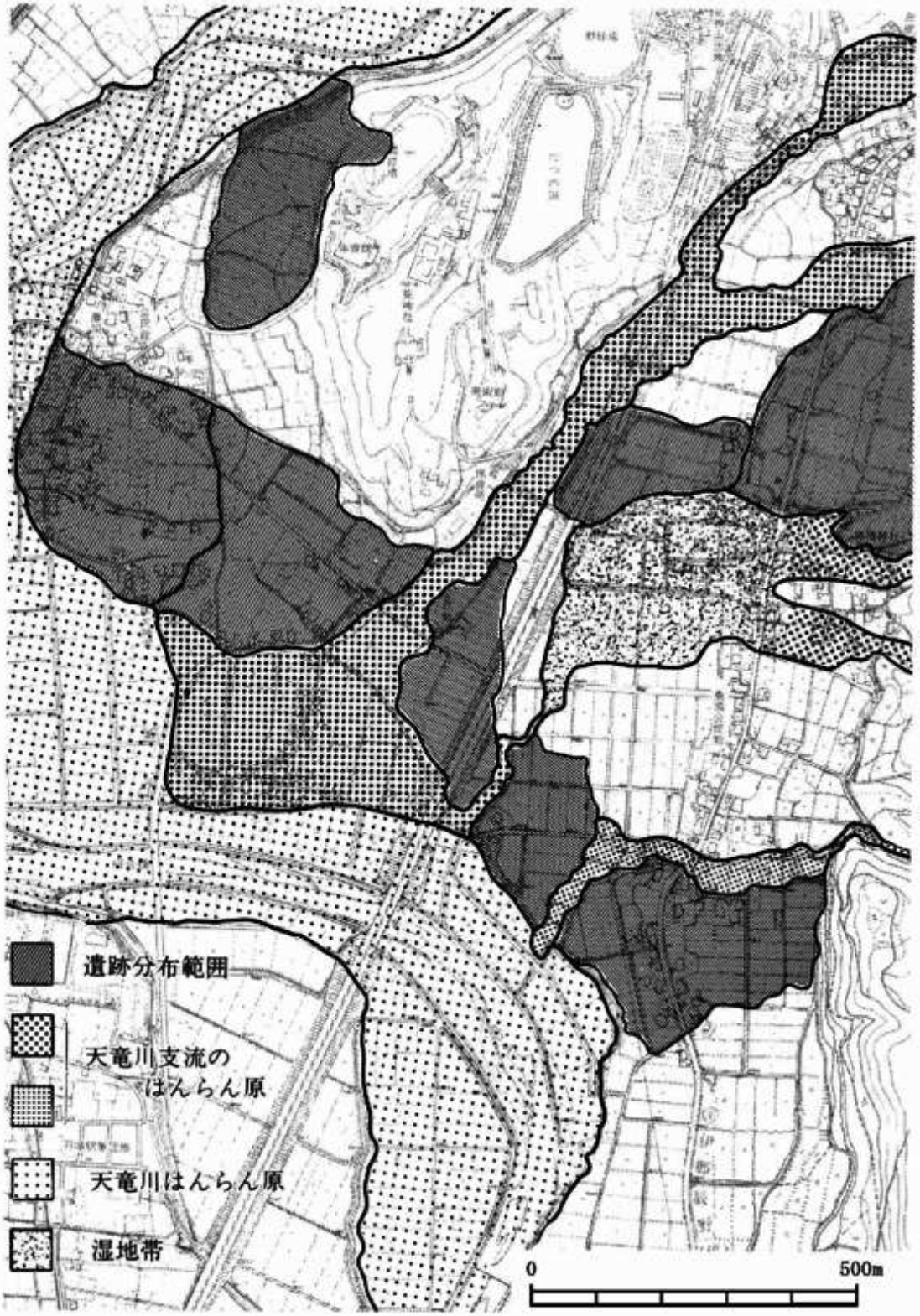
八反田遺跡は樋之沢川左岸の段丘上にあり、圃場整備事業中に弥生時代後期の埋甕炉多数が発見され、大規模な集落址であったことが確認された。

矢沢原遺跡群は南を矢沢川、北を板橋川、二洞川によって挟まれた25haに及ぶ広大な扇状地に富士浅間、矢沢原、矢沢原西、宮の窪、千鹿頭白山の５遺跡が密集している。縄文、弥生、古墳奈良、平安の各時代と、中世以降の遺物など多数が採集されている。

以上おもな遺跡についてふれたが、先にも述べたように樋口地区は大規模な弥生時代の集落址が過密と思えるほどに密集している。第５図に示したように現在の水田地帯を取り囲むようにして集落址が存在している。下田、東樋口地区は天竜川へ流れ込む支流が幾筋もあり、大きく蛇行して流れ込んでいたため、大きな湿地帯が形成されている。現在でもこの地区の水田は水はけが悪く、平成元年度の試掘調査においても、粘土質の土壌が一面に広がっていることが確認されており、この湿地帯を中心として弥生時代の集落が展開していたと推定される。また各遺跡からは石庖丁をはじめ、樋口五反田遺跡では炭化米が出土するなど、稲作との関連性が強く感じられる地域としても注目されている。

No.	遺跡名	縄文時代					弥生時代	古墳時代	奈良平安	平安以降
		早期	前期	中期	後期	晩期				
175	姫御前口			○			○		○	
176	樋口内城	○	○	◎	○		◎	◎	◎	◎
178	矢沢原遺跡群	○	○	○			○	○	○	○
180	山際			○					○	
181	荒神山西	○	○	◎	○?		◎	○	○	○
183	荒神山おんまわし	○	◎	◎	○		◎		◎	○
184	窪畑	○		◎	○?		○		◎	◎
185	荒神社矢沢			◎					○	
186	樋口五反田	○		◎	○	◎	◎	◎		
192	八反田						◎			
193	屋敷前			○						
197	荒神山南			◎						
244	万五郎								○	
245	荒神山南麓			○						

周辺遺跡一覧表（○は遺物出土、◎は遺構出土を示す）



第5図　樋口区周辺の弥生時代の遺跡

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　調査の方法と調査結果の概要

今回の調査地区は第１次調査区に隣接した箇所であり、前回の調査で遺構・遺物の状態を把握していたため、ただちに本調査を実施した。ベンチマークは第１次調査時に設定したものを使用し、グリッドは前回と統一して使用した。グリッドは2m×2mを基準として東西方向にアルファベット、南北方向は数字で表わした。

遺跡内は第１次調査によって状況を把握していたため、重機によって表土を剥ぎ取り、以下は手作業で進めた。遺構の所在の確認まではジョレンによって掘り下げ、遺構内の排土には移植ゴテなどを使用した。なお、土坑は半カットの状態で掘り下げ住居址は土層あぜを残すなどし、遺構内の土層の状態をできる限り観察し、記録化を行った。出土遺物の取り上げは表土下から遺構確認面まではグリッド別、層位別に行い、遺構内の遺物は各遺構別に取り上げ、必要に応じて適宜出土位置やレベルを記録し、図化及び写真撮影を行ったものもある。また整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には遺物番号を註記した。現場での撮影には一眼レフ２台を使用し、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムを用い、出土遺物の撮影は大型カメラにより６×９モノクロームネガフィルムを使用した。

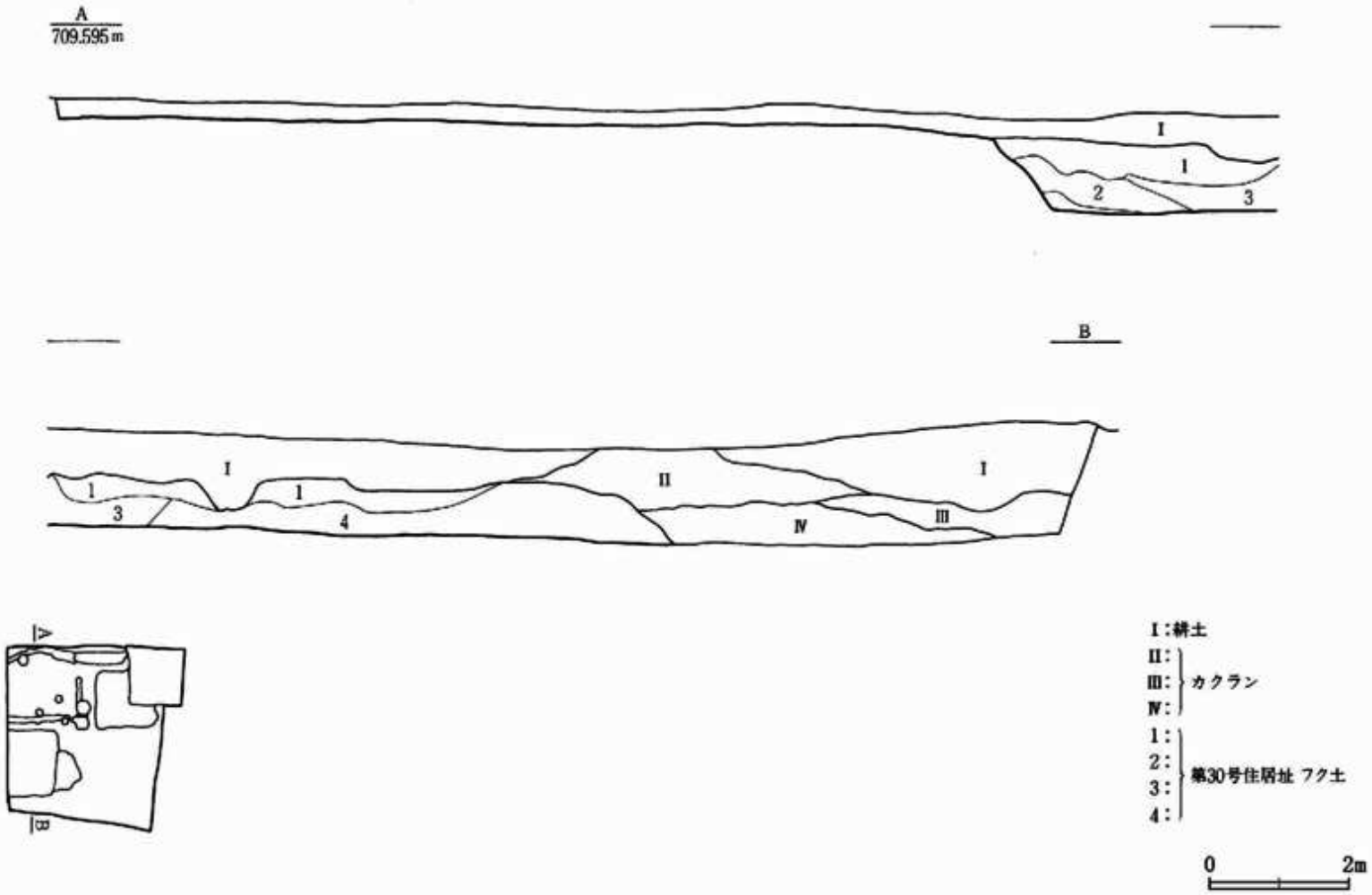
今回の調査での出土遺構・遺物の概要は次のとおりである。

１．竪穴住居址６基（弥生時代２基、平安時代４基）
２．方形周溝墓１基
３．土坑６基
４．不明遺構１基
５．ピット約５ヶ所

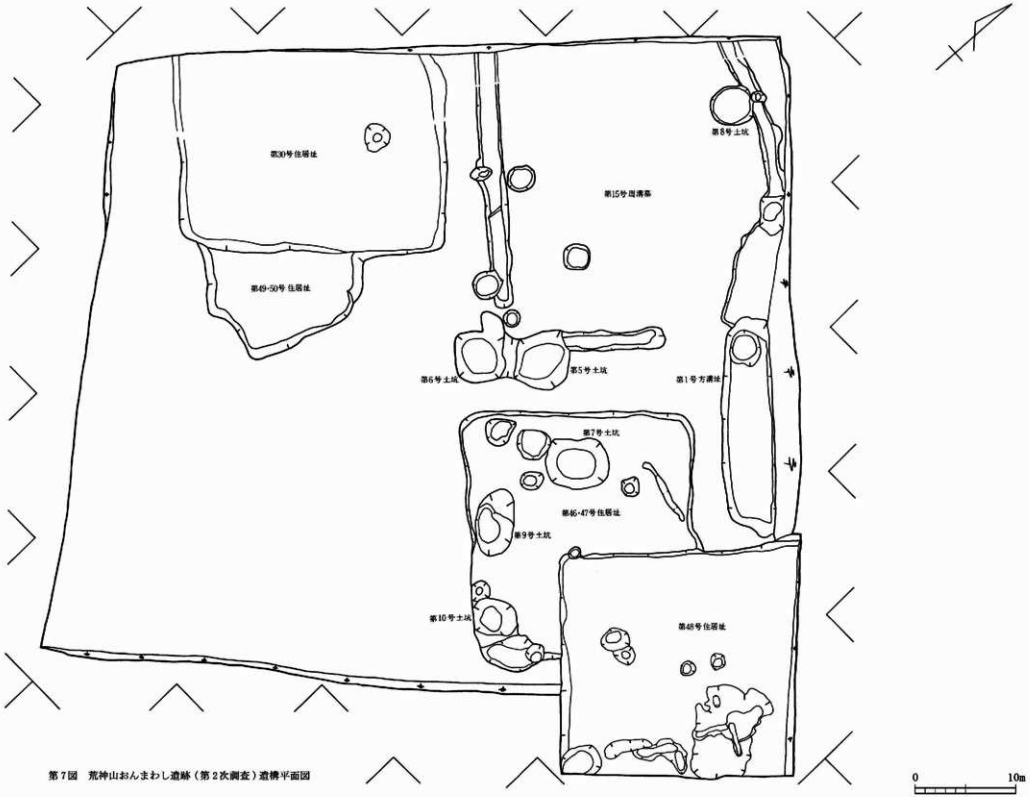
出土遺物総点数（土器、石器、陶磁器）は８１７点である。

第２節　遺跡の層序

荒神山おんまわし遺跡の東端に位置する今回の調査地点は、昭和十年代に行われた区画整理事業によって平安時代住居址の床付近にまで耕作が及んでいる地点や、埋土を行った際のかくらん等が及んでいる箇所があり、基本層序として分層することは困難であった。今回の遺構確認面は荒神山より流されてきた二次堆積ローム上と考えられ、また確認面下では浅い箇所では50cm、深い箇所でも約1mで地山である河床礫に達している。さらに調査区南側の一段下がった水田ではロームは全くのせておらず、耕土直下は地山となっている。一方第１次調査での対象地区である北側ではロームが厚く堆積しており、縄文時代早期の押型文及び表裏縄文、条痕文系土器等を伴う礫群が出土している。



第6図　調査区土層断面図



第７図　荒神山おんまわし遺跡（第２次調査）遺構平面図

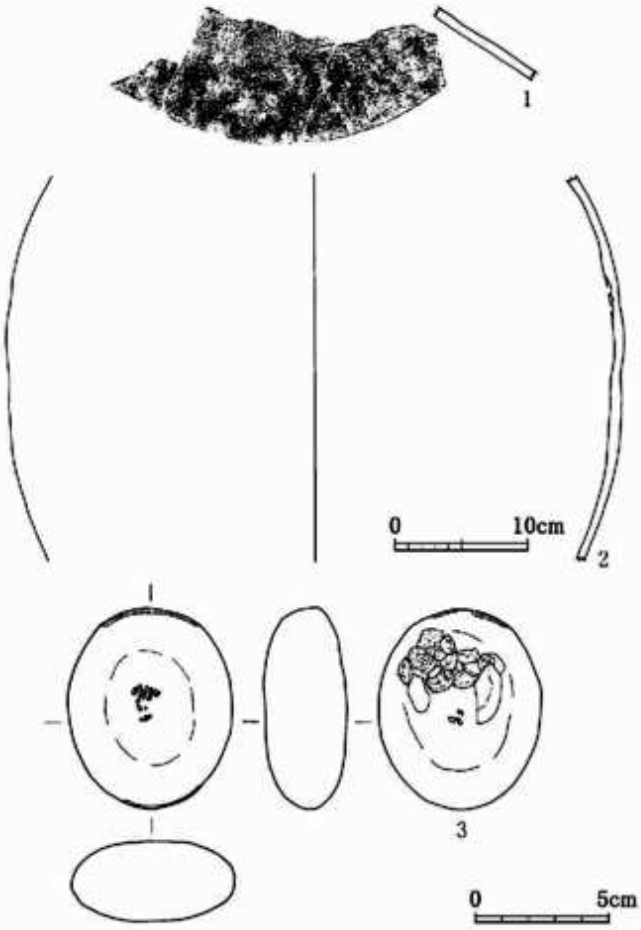
第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　弥生時代の遺構と遺物

第30号住居址

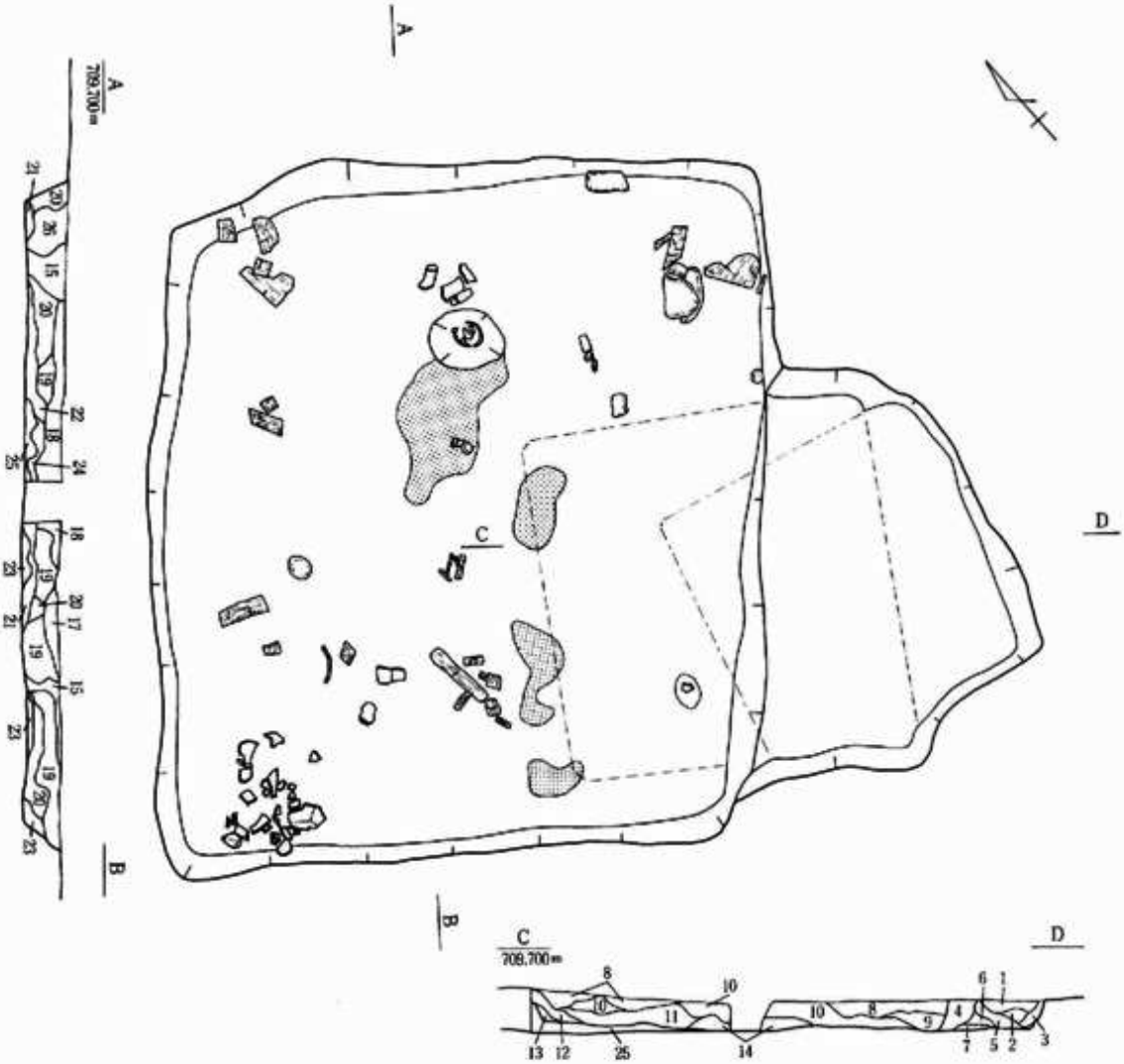
平成元年度に調査を実施した際に西半部は調査されていたために、第２次調査では東半部の調査を行った。この住居址は５ｍ×４ｍの隅丸方形で全体的にやや歪んだプランであり、壁高は約35cmである。この住居址は表土直下のローム層より検出された。床面付近には多量の木炭が出土しており、火災住居と考えられる。また柱穴を確認することはできなかった。なお住居址西隅からは大型の壺（第８図－１・２）が破片として出土している。埋甕炉は小さく、作りも粗雑で貧弱な印象をうける。この土器は口縁部を下にして使用されていた。床面は全面よくしまった貼床が施されている。また東壁付近より、よく使用された磨石が出土している。

遺物　第８図－１・２は大型の壺で、体部はほぼ球形である。外面には全面にヘラミガキが施されており、内面は剥落が著しく、調整は不明である。全体的に歪んだ土器で、体部上半部にはクシ描円弧文が施文されている。３は床面出土の磨石である。安山岩製で全体がよく磨かれ、側面には敲打痕を留めている。また、中心部付近には小さな打撃痕が、数ヶ所残されている。第10図－１～９は体部全面にハケ調整が施されている甕である。１は口唇部に刻みをもち、口縁部は外反してたちあがり、頸部はよくしまっている全体的に均整のとれた土器であり、体部下半はヘラミガキを施してハケによる調整痕を消しているが、あまり密ではないために、所々にハケ調整の痕跡を残している。内面は口縁部から頸部まで横位のハケ調整を施し、体部はナデ調整である。器壁は比較的薄手に仕上げられている。２～９は１とは別



第８図　第30号住居址出土遺物（1）

個体であり、口唇部に刻みをもたず、外反ぎみにたちあがる口縁部をもち、頸部付近に縦位または斜位のハケ調整を行ったのちにクシ描波状文を施している。またハケ調整は土器体部全体に施されていたと考えられる。内面は口縁部から頸部付近までは横位のハケ調整を施している。10は小型の甕である。文様は何も施されておらず体部まで全面ナデ調整で仕上げられ、口縁部は強く屈曲し、頸部はあまりしまっていない。体部内面は一部ヘラ状工具によって縦位にナデ調整を行



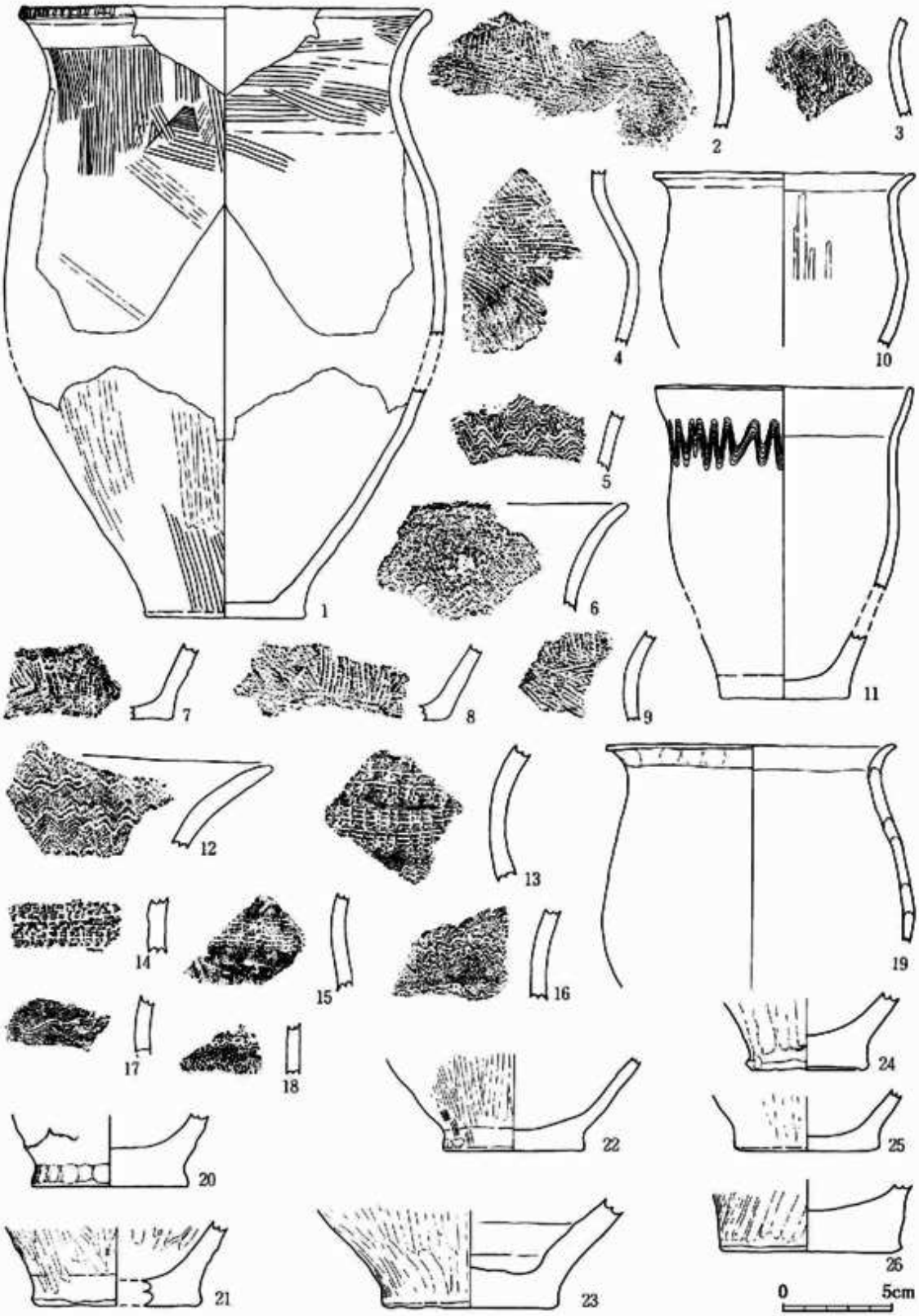
1:暗褐色土(小石混じり)
2:暗褐色土(黄色味がかる)
3:暗褐色土(黄色土混入)
4:暗黄褐色土(褐色味がかる)
5:暗黄褐色土
6:暗黄褐色土(暗褐色土混入)
7:黄色土
第50号住フク土

8:暗褐色土(褐色味が強い)
9:黒褐色土(暗褐色土混入)
10:黒褐色土(小石やや混じる)
11:暗褐色土(やや黄色味かかる)
12:黒褐色土(上層部に小石混入)
13:暗黄褐色土(焼土やや混入)
14:暗褐色土(黄色味かかる)
第49号住フク土

15:黒色土
16:暗褐色土(黄色土混入)
17:暗褐色土
18:黒褐色土
19:暗黄褐色土(黄色土混入)
20:黒褐色土(黄色土混入)
21:暗黄褐色土
22:暗黄褐色土(黄色味が強い)
23:黒褐色土(黄色味を帯びる)
24:黒褐色土(黒味が強い)
25:黒褐色土(焼土混入)
26:黄色土(黒色土混入)
第30号住フク土

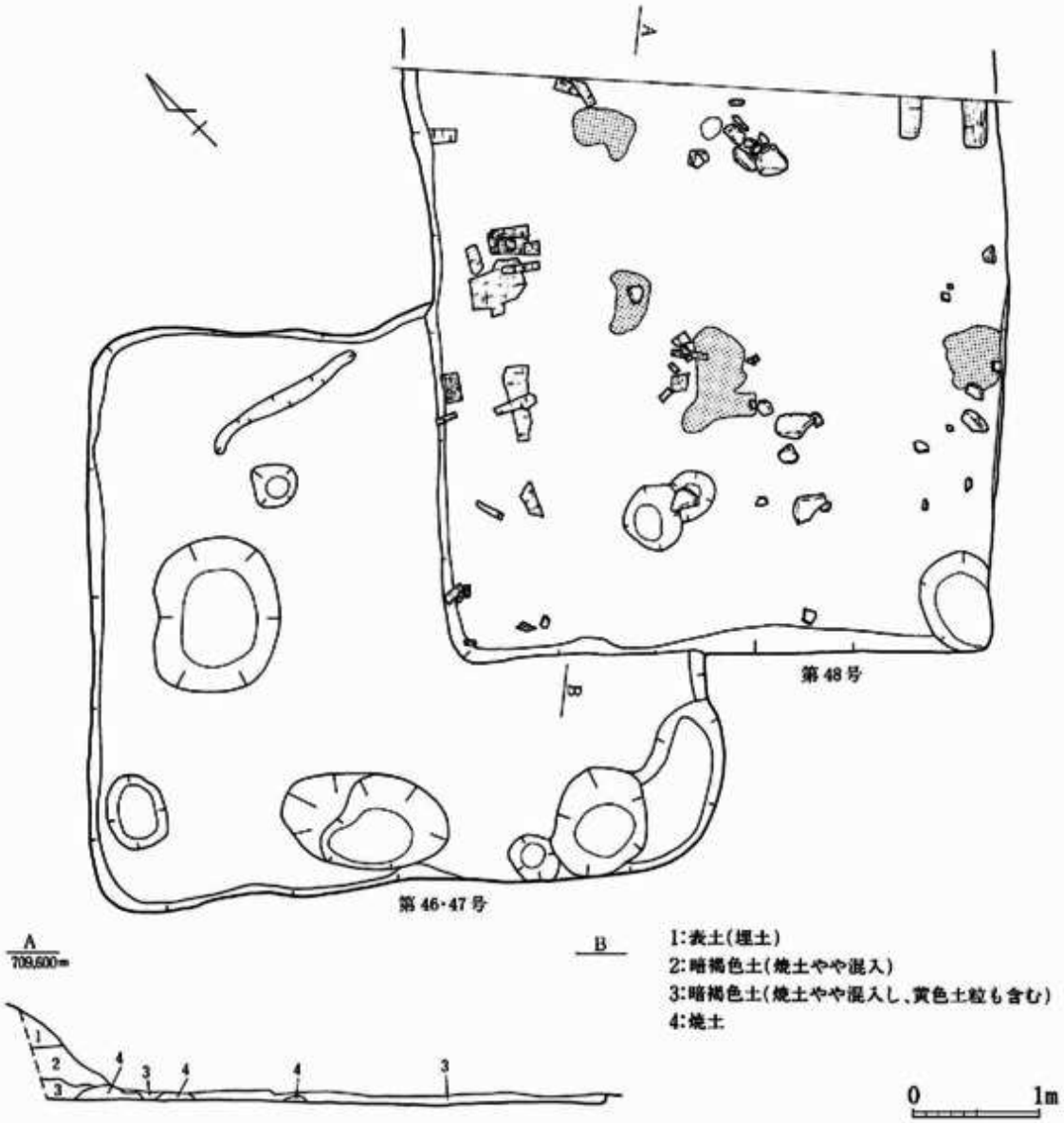
0 1m

第9図　第30号住居址実測図



第10図　第30号住居址出土遺物 (2)

っている。11も小型甕であり、口縁部がやや内弯ぎみにたちあがり、頸部には1単位の畿内型クシ描波状文が施されている。また体部は内・外面共にナデ調整によって仕上げられている。19は埋甕炉である。口縁部は指によって強く曲げられたのちにナデ調整によって整形されたものと思われる。最大径が体部中位にあり、体部には接合痕をよく留めている。また器壁全面を縦位のナデ調整によって仕上げている。12は甕の口縁部である。口縁部上部付近にまでクシ描波状文が施され、強く外反している。13〜18は甕の頸部と考えられ、13・14はクシ描簾状文が数単位施文されている。特に13では、簾状文の上部には振幅の少ない波状文、下部にも波状文が施文されてい

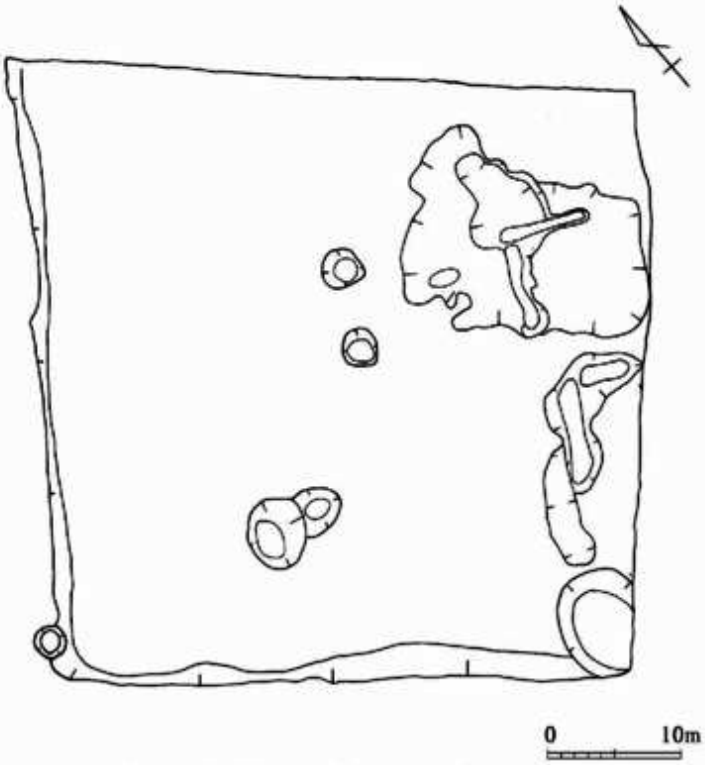


第11図　第48号住居址実測図 (1)

るのがわかる。20は底部に指頭圧痕を明瞭に留め、体部はヘラ状工具によって縦位にナデ調整が施されている。内面はナデ調整である。

21～26も底部であるが、外面には体部下部にまで比較的密な縦位のヘラミガキが施されている。22・25は器壁が薄手であるのに対して26は厚手であり、体部もまっすぐにたちあがっている。

1～9の土器は町内でも出土例の少ない貴重な資料であり、いわゆる恒川式Ⅲ期後半からⅣ期頃に位置づけられるものと考えられる。また10～26はいずれも諏訪地方の系譜をひく土器と考えられ、橋原式の古い段階に位置づけられよう。



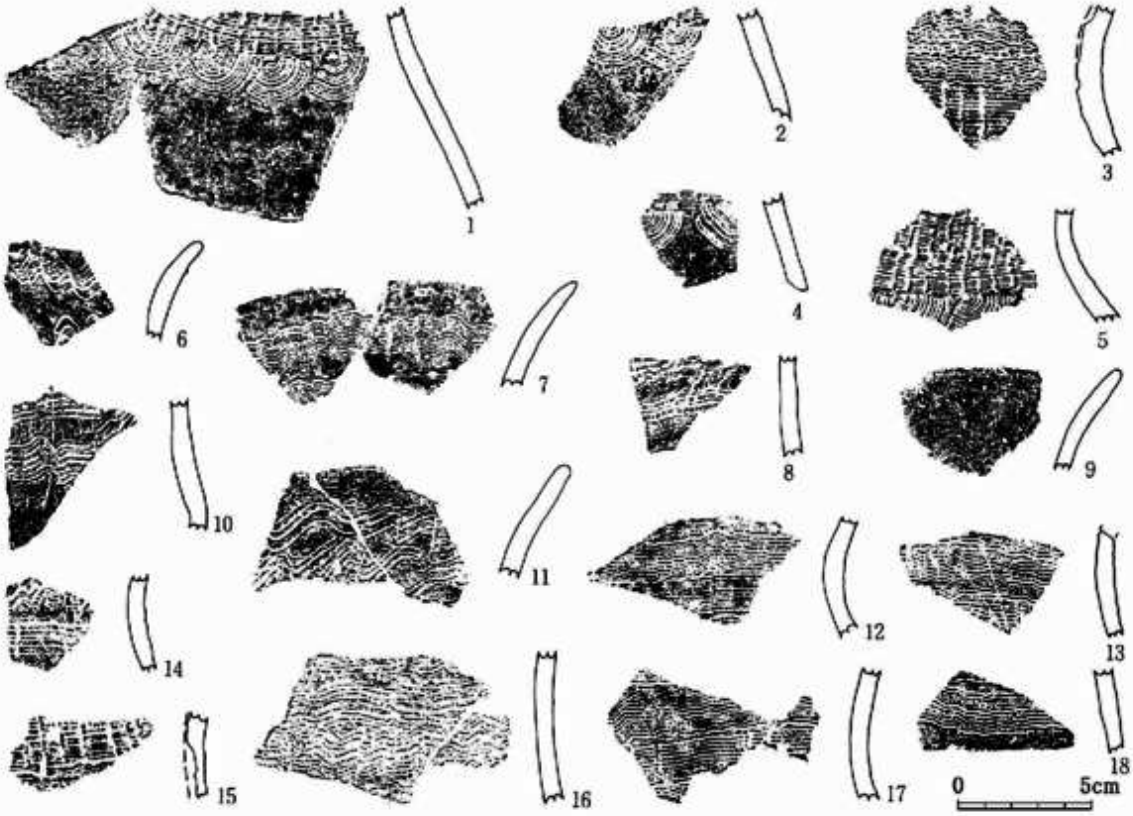
第12図　第48号住居址実測図（2）

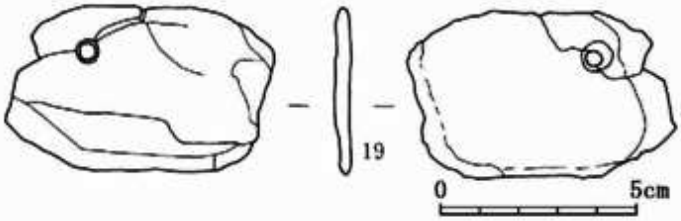
第48号住居址

この住居址は第46・47号住居址および区画整理事業によって削平されており、壁高は約10cmと非常に浅い。また北東の一部は調査対象地区外となったために一部が未調査となってしまった。

プランは東西4．4m、南北約6mほどと推定される隅丸長方形で、床付近では火災住居のために木炭が多量に出土しているが、遺物の出土量は少なかった。柱穴は確認されず、東壁付近には不整形なくぼみが検出されたが、どのような意味をもっているのかは不明である。また南東壁隅には径80cm深さ20cmの土坑が掘り込まれていたが、土坑内からは何も出土していない。床は全面に良好な貼床が施されており、住居址中央付近には直径15cm深さ7cmほどの浅いピットが2ヶ所から検出された。また南側床では砂岩製の石庖丁が出土している。

遺物　第13図－1～5は同一個体と推定される。すべて壺の体部上部から頸部にかけての破片である。1は体部上半であり、簾状文を施文後に円弧文を描いている。2・4はやはり体部上部であり、円弧文が施されている。3は頸部であり、簾状文の上部に振幅の比較的小さい鋭内型のクシ描波状文が数単位施されている。5は体部上部から頸部にかけてのものであり、2単位の簾状文がみられ、その下部に円弧文が施されている。これらの破片から、施文順位をみると、まず





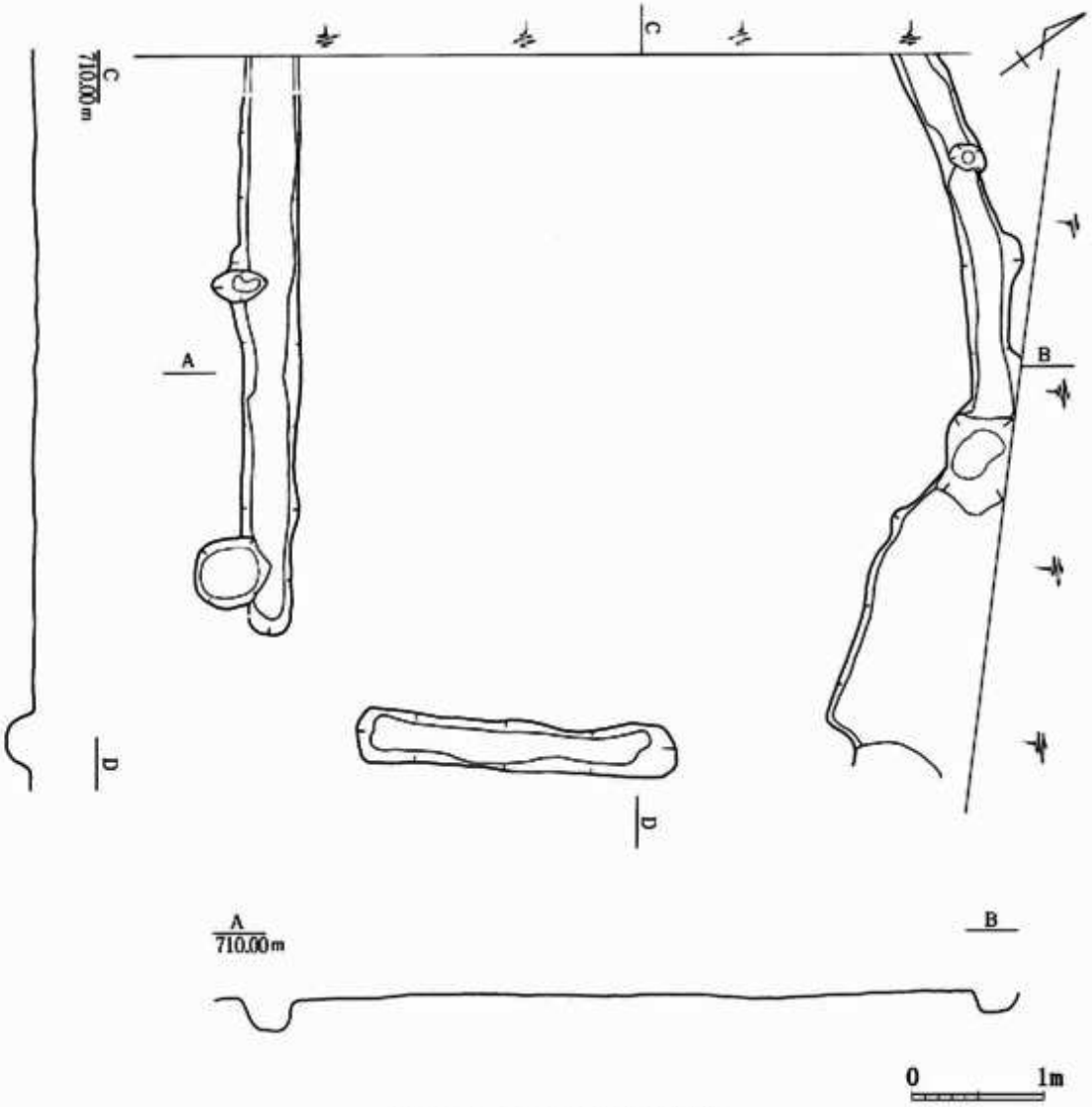
第13図　第48号住居址出土遺物

クシ描簾状文を2単位施文した後に上部に数単位のクシ描波状文、下部に円弧文を施文している。6～14・16～18は甕の破片であり、いずれも頸部から口縁部にかけてクシ描波状文を施文している。6・7は比較的丁寧に口縁部上部から施文しているのに対して、9・11などはやや雑な印象をうける。また9はあまり明瞭なクシ描波状文ではない。8・10・12～14・16～18は振幅が小さい波状文であり、簡略化されたものかとも考えられる。また、14には波状文の下に簾状文が施文されている。15は甕の頸部で、簾状文が付けられている。19は石庖丁である。砂岩製のために非常にもろく、剥離が著しいので、製作痕跡は留めていない。穿孔は表裏の両面より行っており、若干くいちがっている。また、この孔に紐等を通した痕跡は確認されなかった。

第15号周溝墓

第１次調査時に検出することができなかったために西側の周溝は確認されなかったが、３方の溝は認められた。覆土は黄褐色土で、幅は約40cmである。４方隅はブリッジとして残されていたと推定される。しかし削平が著しかったために主体部を確認することはできなかった。また北側の周溝は直線的ではなく、やや内弯している。また東側は第１号溝状遺構によって切られていると考えられる。周溝の深さは約25cmであり、相当量削平されてしまっていると考えられる。

この周溝墓は弥生時代と位置づけているが、第一次調査の周溝墓とは時期が異っていると考えられ、更に今回出土した住居址とも時期が前後して作られたものと推定される。



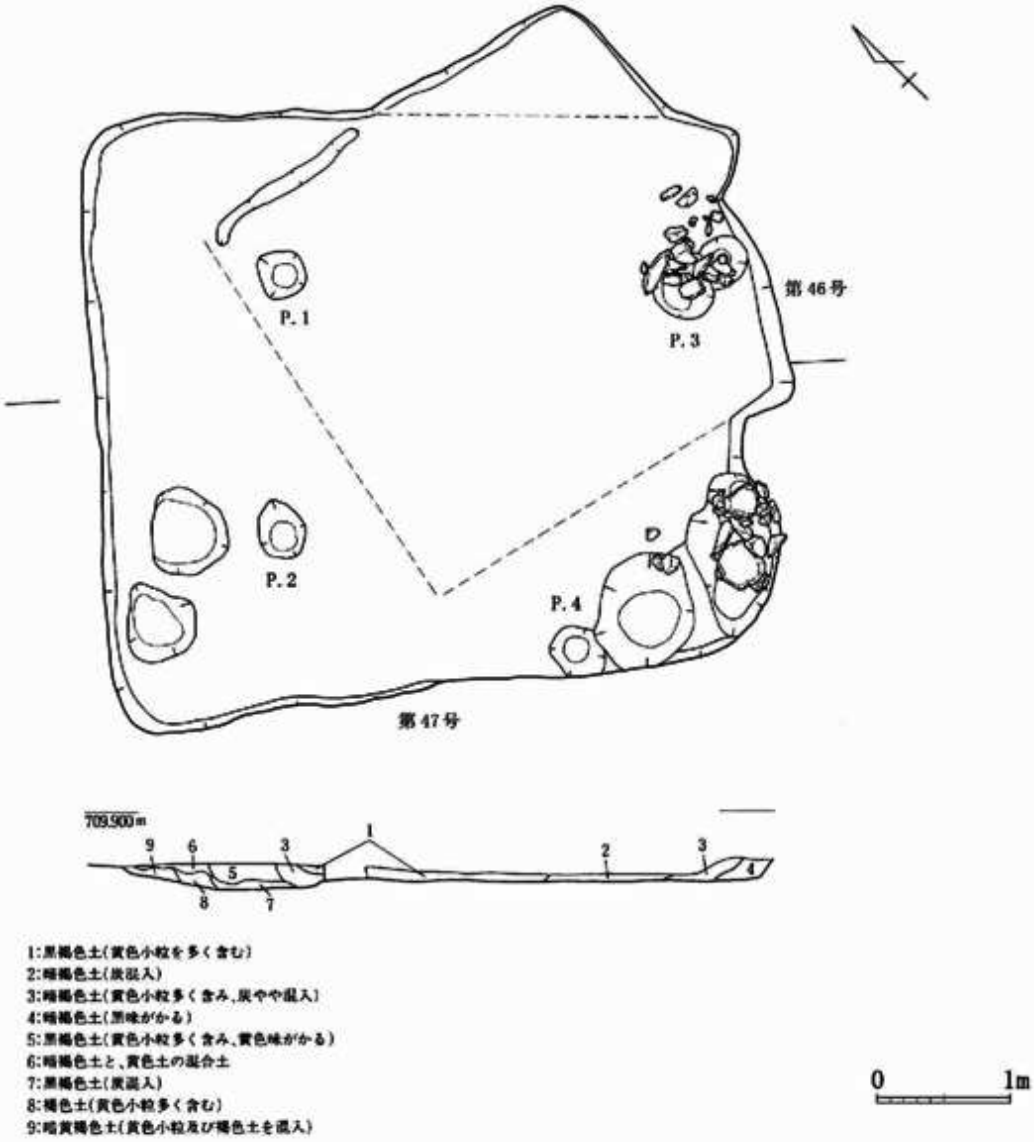
第14図　第15号方形周溝墓

第２節　平安時代の遺構と遺物

第46・47号住居址

調査区の北東地区より検出された住居址であり、両住居址ともに区画整理によって壁はほとんど削平されていた。

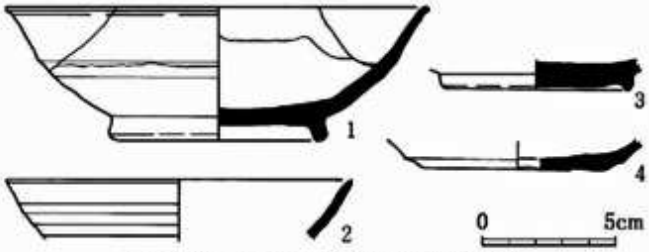
第46号住居址は第47号住居址を切って掘り込んでおり、プランは南北4．7m、東西５mの方形である。壁高はおよそ５cmほどであり、ほとんど残ってはいなかった。カマドは南隅より出土したが破壊されており、原形を留めてはいなかったものの石組みであった可能性が強い。また柱穴



第15図　第46・47号住居址実測図

としてはＰ１～Ｐ４が該当すると思われ、深さはＰ１が20.7cmＰ２が24.4cmＰ３が17.3cmＰ４が13.3cmとなっている。床は西半部を除いて堅い貼床が施されていた。

遺物　床直上にまでかくらんが及んでいたために出土した遺物は図示したものがほとんどすべてである。１は灰釉陶器の碗である。内外面共に漬け掛けによって体部上半部まで施釉されている。釉薬は外面ではほとんど施されているかどうか分からない程度である。器壁は比較的厚手であり、少し外反ぎみの方形の高台を貼り付け、口縁部は少しつまんで外反させている。また見込み中心部分はロクロ未使用によるナデを施し、外面底部はナデによって糸切り痕を消している。また３はカマドより出土した灰釉陶器の底部である。体部に比べて底部は厚手に仕上げられており、高台は直立し、やや低い。底部は高台周辺はナデ調整されているものの中心部付近では糸切り痕が残されていた。釉薬は一部底部にまで施されており、見込み部分には重ね焼きの痕跡を留めている。このような形体から段皿の可能性が強い。その他に２・４は須恵器坏の破片である。４は底部であり、糸切り痕をのこし、体部はやや開きぎみに立ち上がっている。２は上半部である。器壁は比較的薄手に仕上げられ、口唇部はつまみ成形されている。両者とも焼成は良好であり、暗灰色を呈している。



第16図　第46号住居址出土遺物

なお、須恵器は本住居址に伴うものではなく、混入品としてとらえておく。

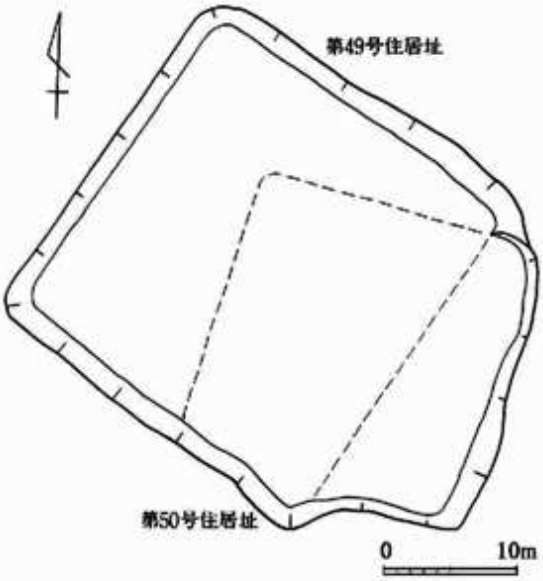
第47号住居址は第46号住居址によってほとんど削り取られてしまい、東北部を一部残しているのみであった。プランは3．3m四方の方形竪穴であると考えられ、柱穴は確認されなかった。またカマドは第46号住居址によって破壊されてしまったと考えられる。

遺物　遺物は発見されなかった。

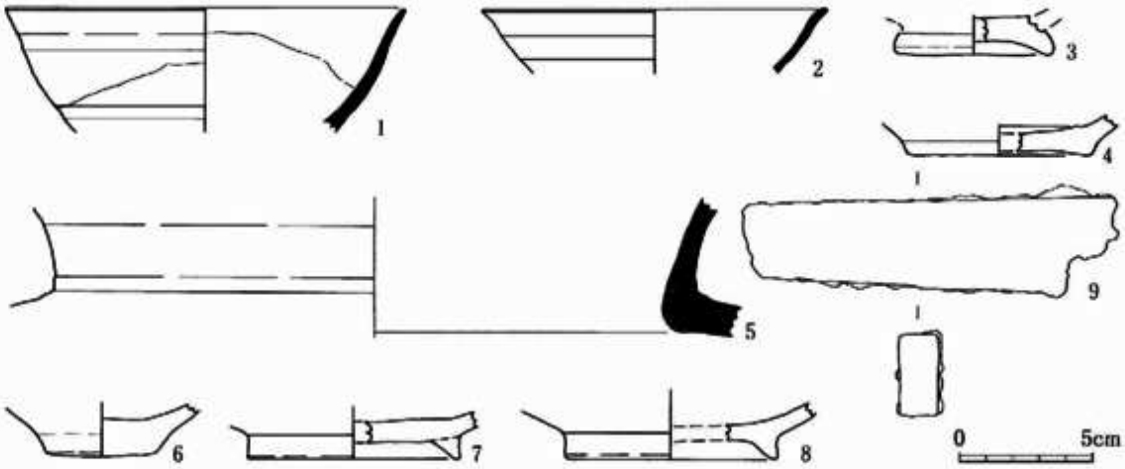
第49・50号住居址

第30号住居址の調査中に存在を確認したために壁を一部掘り下げてしまったが、第49号住居址が、第50号住居址を掘り込んでいる様子は観察することができた。

第49号住居址は５ｍ×５ｍの方形であり、壁高はおよそ10cm程となっているが床面は軟弱で、貼床の存在は認められなかった。更に柱穴も検出されず、カマドの存在も認められなかった。



第17図　第49・50号住居址平面図



第18図　第49･50号住居址出土遺物（1～4･9：第49号住居址、5～8：第50号住居址）

第50号住居址は第49号住居址によって切られているが、推定約３ｍ×３ｍの方形プランであったと考えられる。柱穴はやはり確認されず、カマドも検出されなかった。第49号住居址よりも小さく、主軸は磁北にほぼ一致している。貼床は認められなかった。

これらの住居址は柱穴やカマドが確認されず、焼土・炭等も検出されなかったことを考えると、この遺構を住居址としてよいかどうかは少々疑問が残る。

遺物　第18図－１～４は第49号住居址より出土した遺物である。１は灰釉陶器碗の体部である。口縁部は尖りぎみに仕上げられ、体部下半部は内弯ぎみにたちあがり、上半部にいたってやや外反ぎみにひろがっている。釉薬は漬け掛けであり、内・外面共に体部上半にまで施釉されている。２は須恵器坏の体部である。比較的薄手の器壁をもつやや開きぎみの形体のものであり、口縁部はやや外反している。口唇部はつまみ整形され、やや屈曲して仕上げられている。３は土師器碗の底部である。ロクロ成形された体部に高台を貼り付けている。底部中央付近には糸切り痕を残している。４は土師器坏の底部である。ロクロにより成形され、底部から体部へとたちあがる箇所に一段屈曲部がある。底には糸切り痕を明瞭にとどめている。９は鉄製品である。断面長方形で長さは欠損しているために不明である。用途もどのように使ったものか不明である。

５～８は第50号住居址出土の遺物である。５は甕の頸部である。体部を成形したのちに頸部を貼り付けている。６は土師器坏の底部であり、底部を厚く仕上げてみかけでは高台を付けているようにしている。焼成もあまく、安定していない。底には糸切り痕をとどめている。７・８は灰釉陶器の底部である。７は底部に糸切り痕をナデ消すことなく三日月形高台を貼り付けている。器壁は底部は厚手で、体部はやや薄手に仕上げられている。内面見込みの部分はロクロを使用せずにナデ調整を施している。８は底部で糸切り痕をナデ消した後に高台を貼り付けている。高台は断面三日月形であり、内面見込みの部分はやはりロクロを使用せずにナデ調整を施している。

以上述べてきた遺物はすべて破片であり、包含層より出土していることから、混入品の可能性が強い。

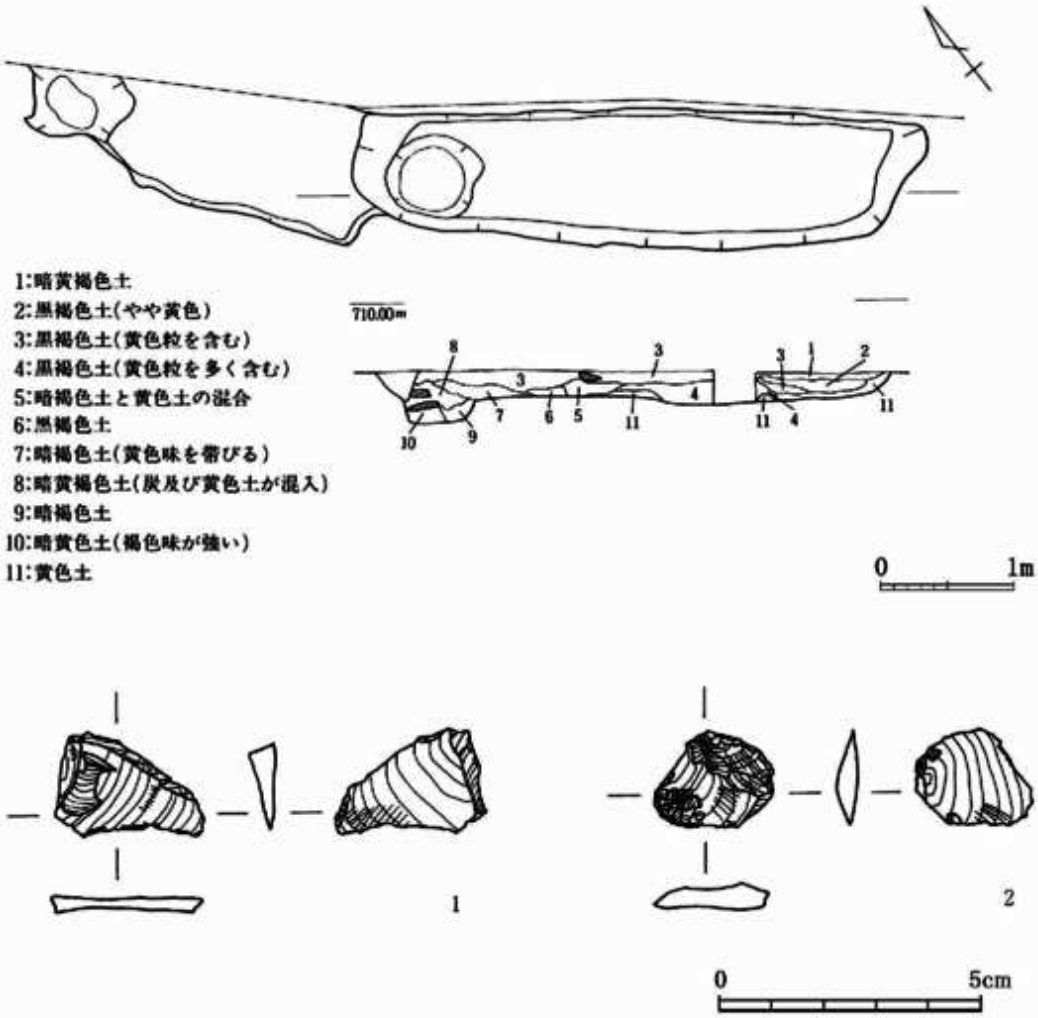
第３節　その他の遺構と遺物

第１号溝状遺構

今回の調査区の北端部から検出された遺構であるが、時代、種類ともに不明なために、ここでは溝址として取り扱っておく。

この溝址は長さ約4．4m、幅約１m現存の深さ約30cmの長方形で、この溝に付随しているとも考えられる直径約70cm、深さ約30cmの土坑が北西隅より検出された。北西側には一段高い断面皿状の溝が重複して出土している。また、溝の西側には第15号周溝墓が出土していることを考えあわせると、この溝も周溝墓の溝の一部である可能性も否定できない。

遺物　この遺構からは第19図の１の黒曜石が１片出土しているのみである。この黒曜石は若干ではあるが、使用した際に生じたとも考えられる細かい剥離が確認されている。



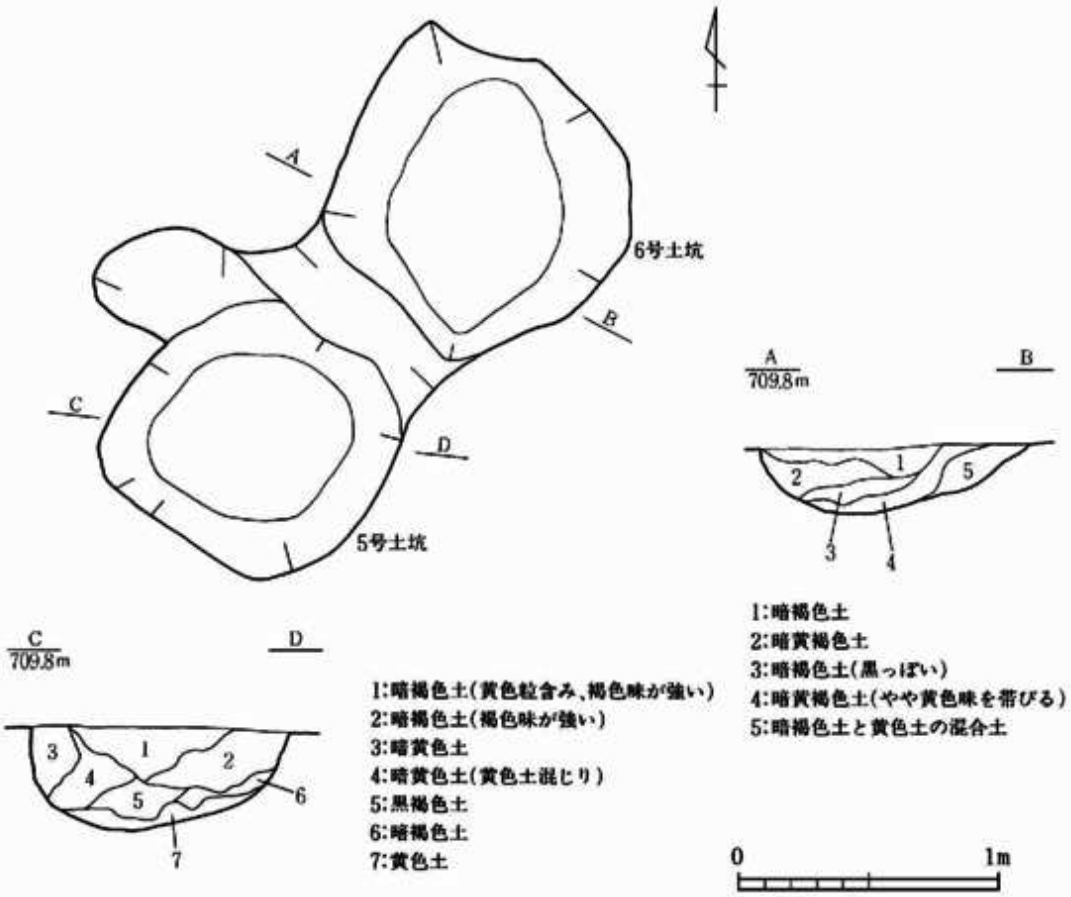
第19図　第１号溝址実測図及び遺物

土坑

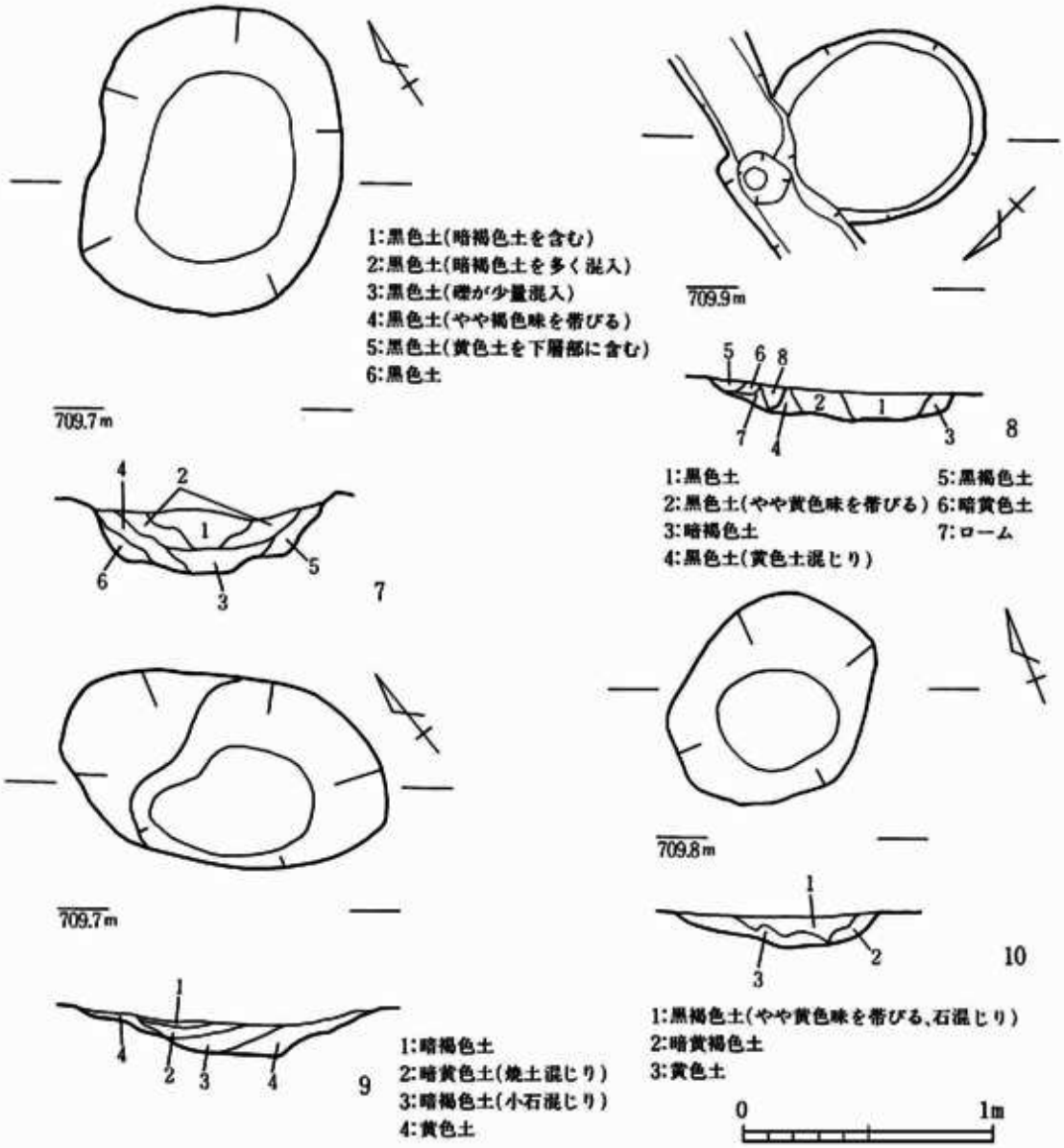
今回の調査では６基の土坑が出土したが、いずれも時代等の確定は難しく、一括して掲載した。第５号土坑は直径約70cm、深さ約80cmであり第６号土坑と接して出土し、第15号周溝墓によって切られていることから弥生時代以前のものと考えられる。

第６号土坑は直径約60cm、深さ約60cmであり、断面は擂鉢状を呈している。両土坑共に覆土中からは遺物は何も出土していない。

第８号土坑はやはり第15号周溝墓によって切られており、直径75cm、深さ15cmと遺存状態は悪



第20図　土坑実測図（第５号，第６号）(1)



第21図　土坑実測図（第1号～第4号土坑）(2)

い。断面は皿状になっている。第7・9・10号土坑はいずれも第46・47号住居址の床面直下より検出されている。

第7号土坑は東西90cm・南北1．2mの隋円形をしており、断面は皿状になっている。

第9号土坑は東西1．4m、南北75cmの隋円形であり、西壁は少々掘り込みすぎてしまっている。深さはおよそ18cmであった。

第10号土坑は直径約75cmの円形で、断面形は擂鉢状になっている。なお、この土坑からは黒曜石が1片（第19図－2）出土している。

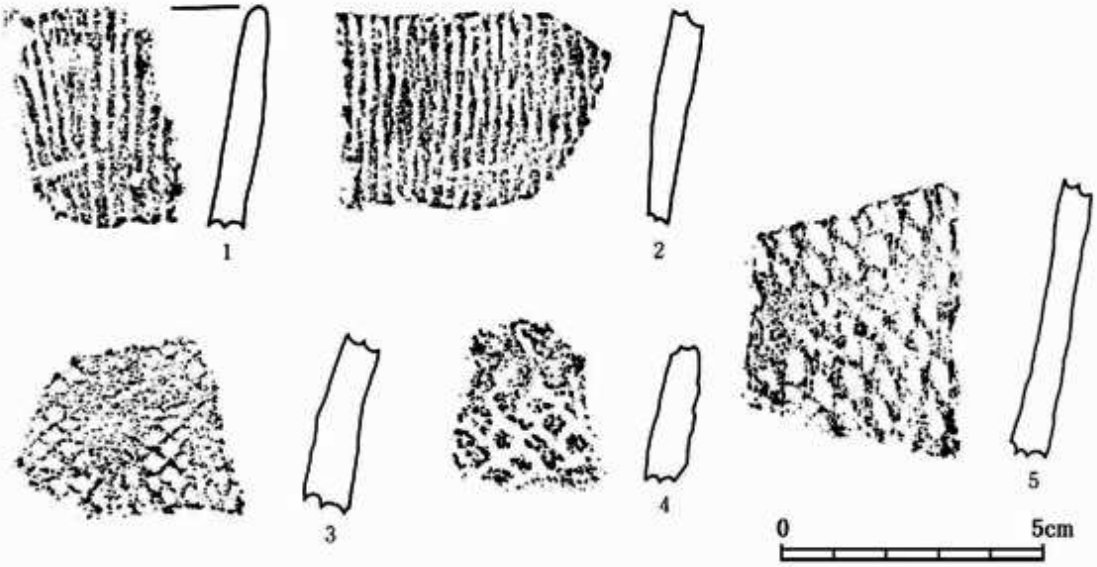
第４節　遺構外出土の遺物

縄文土器

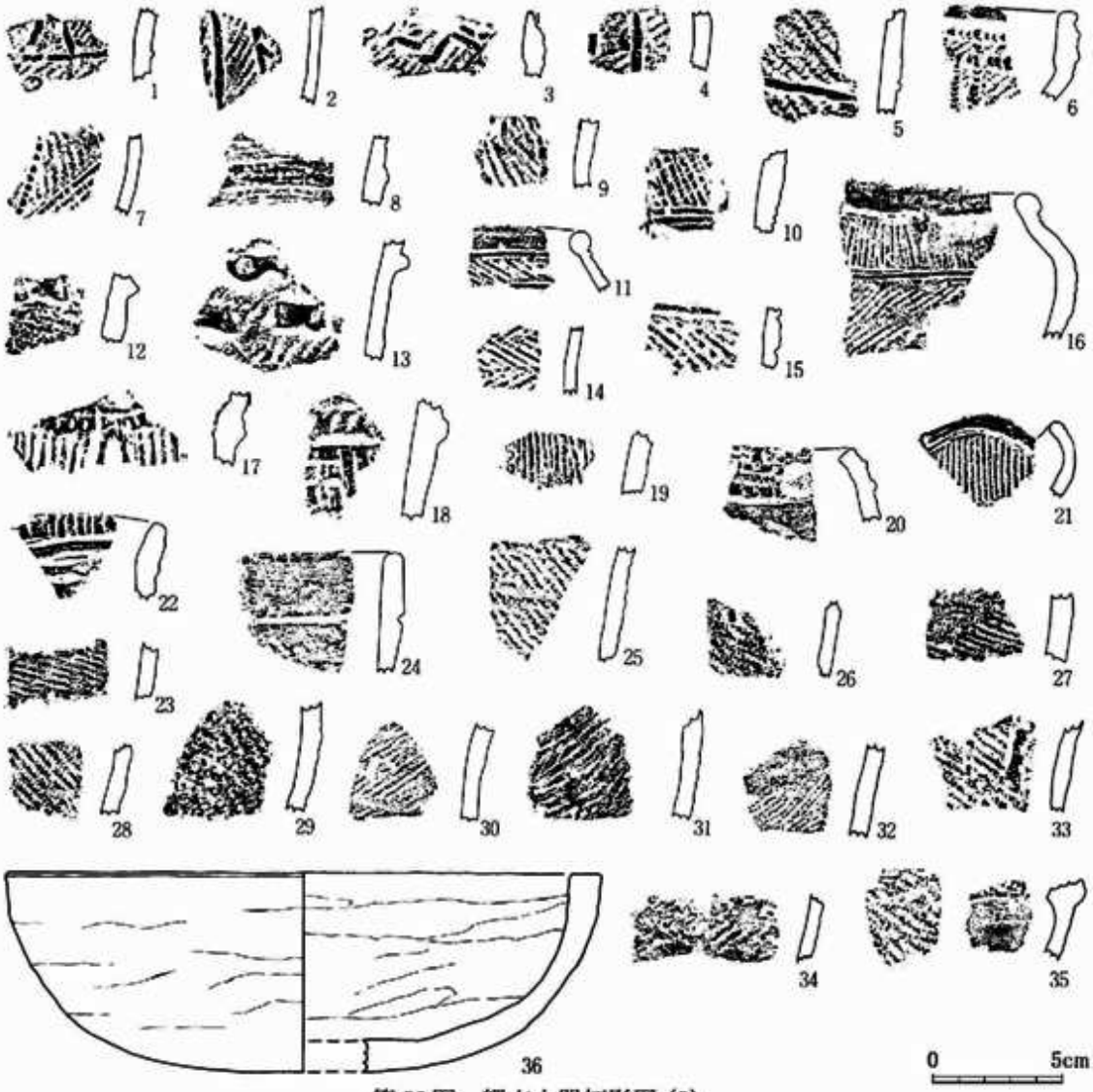
第22図は縄文時代早期の土器である。３～５は押型文土器で、３は菱形の格子目文である。体部上半部と考えられ、縦位に施文している。裏面は剥落が著しく、焼成もあまり良好とはいえない。４は楕円文であり、比較的大型の円形である。横位に施文していると思われ、焼成は比較的良好である。５は市松文である。大きな楕円形をしており、横位に施文している。この土器片も焼成は良好である。１・２は撚糸文土器である。１は口縁部で、２はその同一個体と考えられる。これらの土器片は撚りが細かく、条間隔が狭い。また原体ははっきりしないが、おそらく０段の縄文を用いていると推定される。器壁は５㎜程度である。

第23図は縄文時代前期から後期にかけての土器である。１～９、12・13は縄文時代前期の土器で、６・７は諸磯Ｃ式に該当し、地文として縄文を施文した後に結節浮線文を施文している。６は口縁部で、上端部に横位の結節浮線文を施文し、その後に縦位の結節浮線文を施している。また口唇部付近は粘土紐を貼りつけて突帯としている。１～５は諸磯Ｃ式に後続すると考えられるいわゆる十三菩堤式の土器と考えられ、諸磯Ｃ式と同じく縄文を地文として、その上に細い粘土紐を貼りつけたメーソン状貼付文を施している。３は粘土紐を山形に何段も貼り付けているのがわかる。８・９は縄文を施した土器で、８には横位に突帯を貼り付けた後にその上にも縄文を施文している。なお、８・９は同一個体である。12・13も前期の土器であり、縄文を表面に施文した後に押圧隆帯を貼りつけたもので、体部上半部の破片である。晴ヶ峰式に該当すると考えられる。

10・11・14～22は中期の土器である。10・11、14～16、18・19・22は中期初頭のもので、梨久



第22図　縄文土器拓影図（1）



第23図　縄文土器拓影図（2）

保式の前半期の段階のものと考えられる。いずれの土器も体部上半部のものと思われ、半截竹管状工具により、横位に２～３条の沈線を引き、それを区画文として区画された内側に斜位又は格子目状に平行沈線文を施文している。16では区画文の下部には縄文が施文されている。20・21は中期中葉の土器で、20は井戸尻式の口縁部であり、ソーメン状貼付文を格子目状に施している。21は藤内式の口縁部で、数単位の大きな波状口縁となっているものの１部である。23～35は縄文を施文している土器片である。24は口縁部で、口縁部直下に沈線を横に１本施文した下部から縄文が施文されている。25は体部の破片で、破片中央部にはヘラ描沈線が１条施文され、縄文を切っている。34では縄文施文後に半截竹管状工具による平行沈線文が施文されている。36は後期の

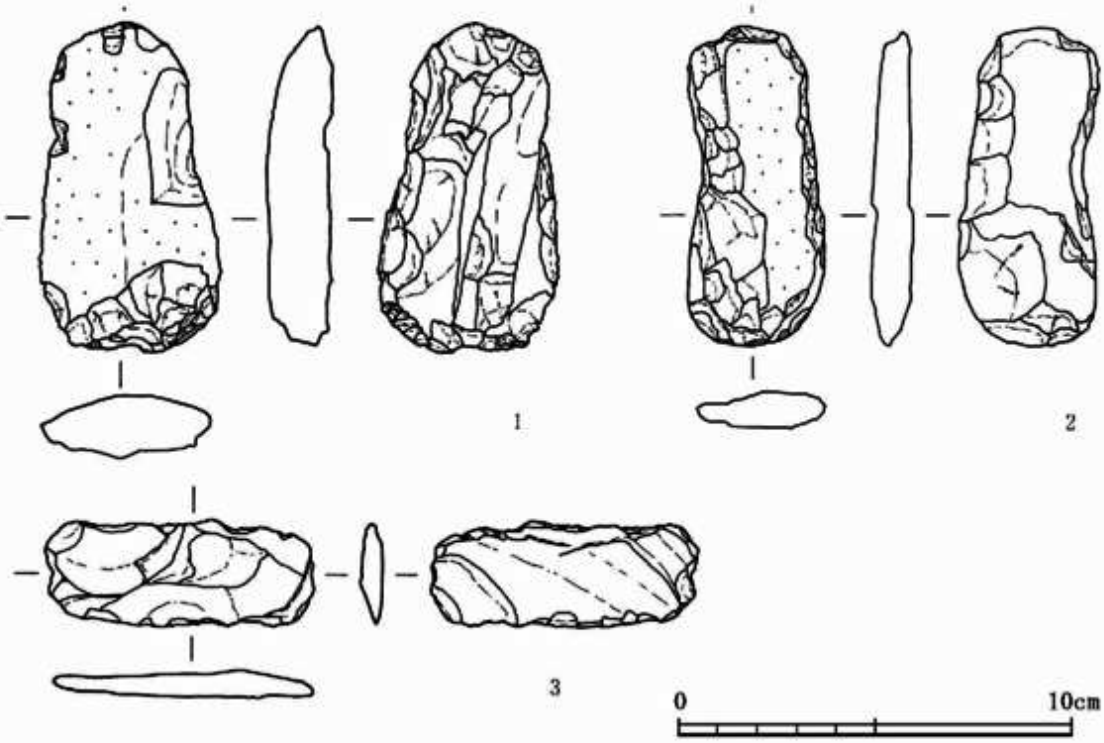
粗製土器の鉢である。口唇部は面取りされている。色調は黒色で、粗いミガキ調整が施されているものの接合痕が明瞭に残されている。器壁は約1cmと比較的厚手に仕上げられている。

石器

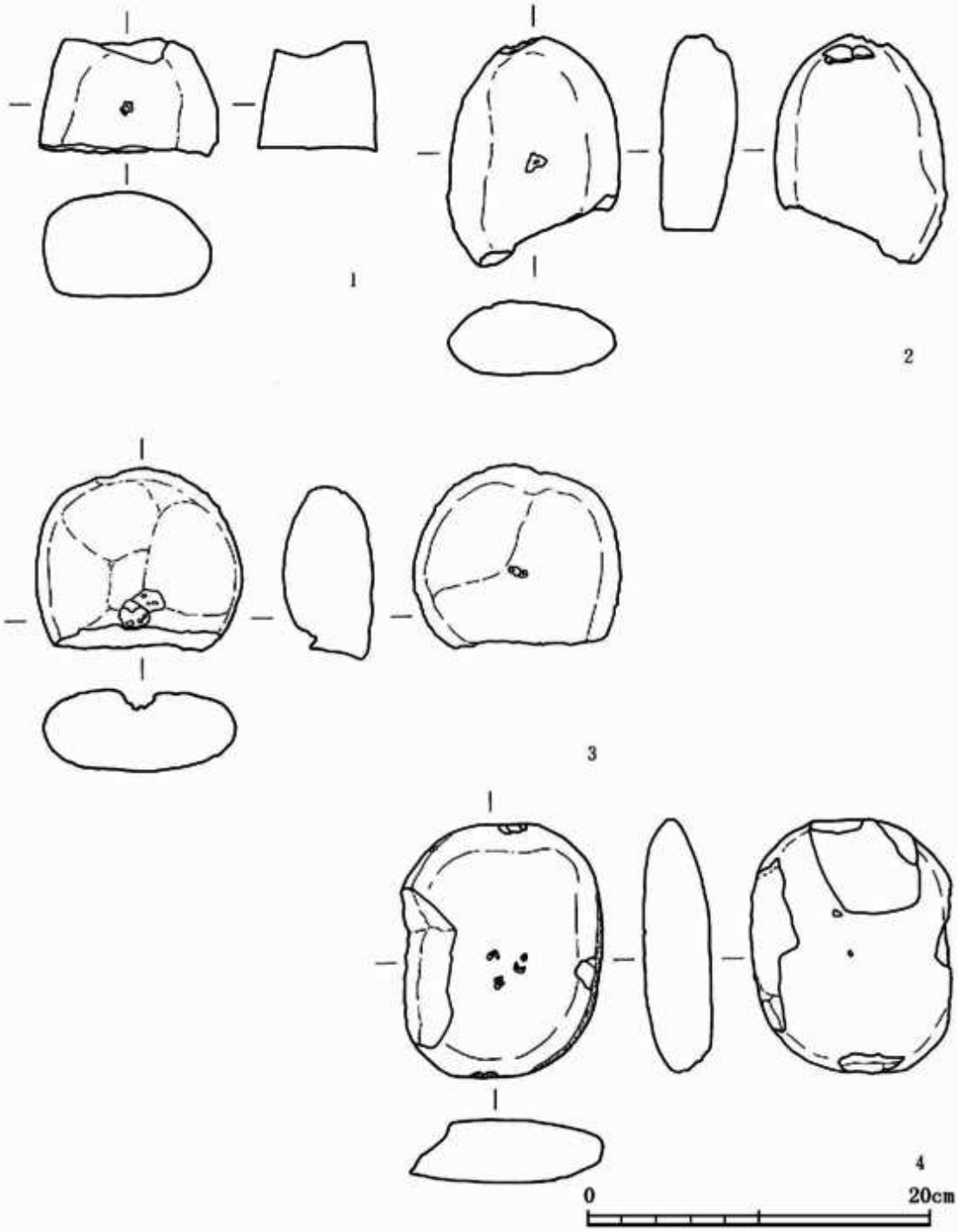
第24図は打製石斧である。1・2は共に安山岩系の石である。1は比較的厚みのある石器で、自然面を中心に加工を加えている。先端部は欠損している。2はやや薄手で、ほぼ完形である。刃部は両面から加工されている。3は横刃形石斧であるが、砂岩系の石を用いており、もろいために剥離痕を明瞭に確認することはできなかった。

第25図は磨石及び凹石である。いずれも欠損している。3は砂岩系の石を使用し、中心部付近は深くくぼみ、よく使われている。1・2・4は磨石で、1は砂岩系、2・4は安山岩系の石を使用している。

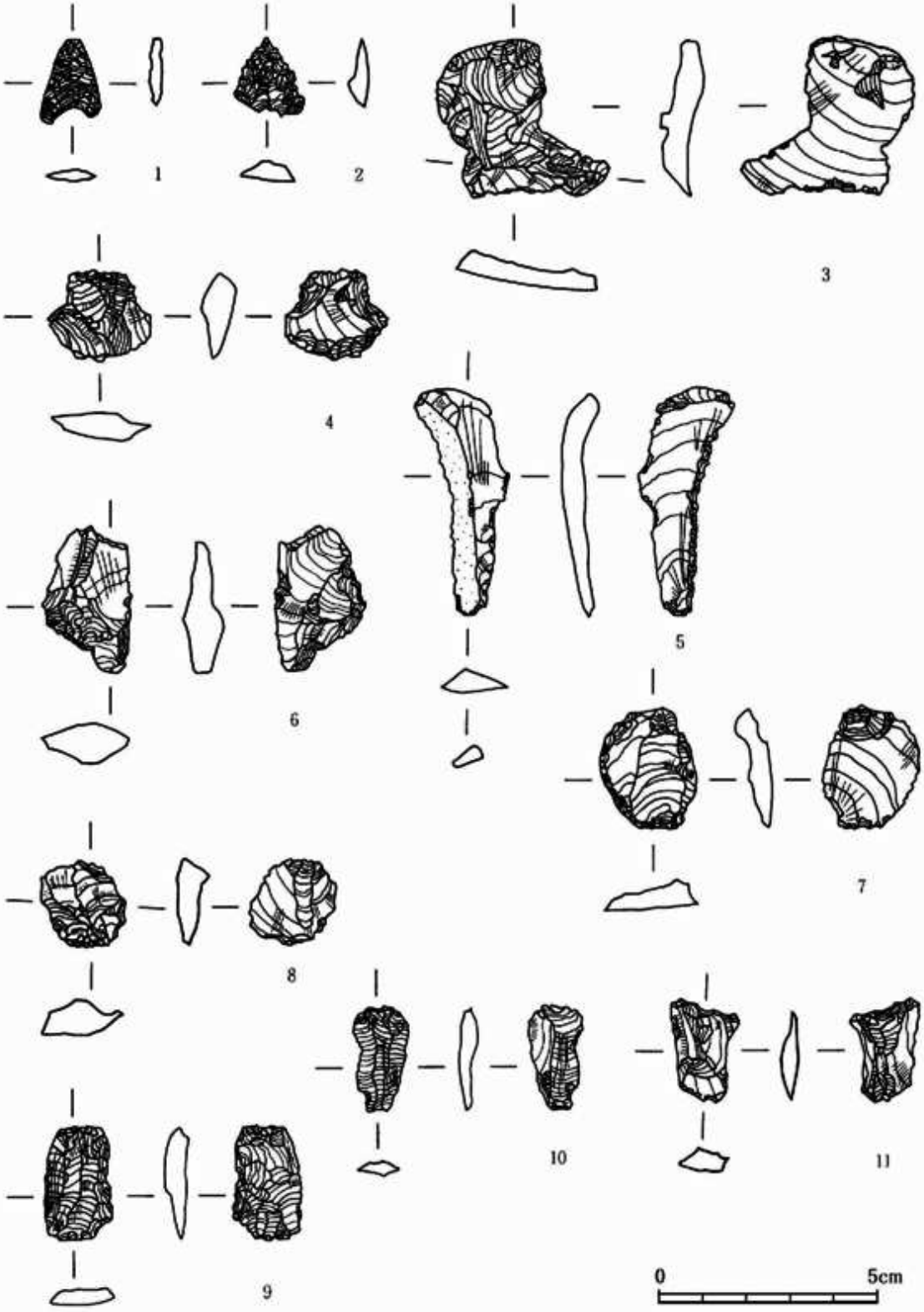
第26図－1・2は石鏃であり、いずれも黒曜石製である。3・4は石匙である。3の下半部は欠損しているが、その後も使用していたらしく、細かい剥離痕が確認されている。4はやや小さいが、完形品と考えられる。5・6は石錐であるが、両者とも先端部を欠いている。7から第27図－1～4まではピエスエスキーユである。いずれもほぼ縦長の長方形をしており、縦位方向に長い剥離痕が確認され、上部と下部にはそれぞれ打撃痕が残されている。第27図－6～12及び第28図は小剥離痕をもつ黒曜石の破片である。



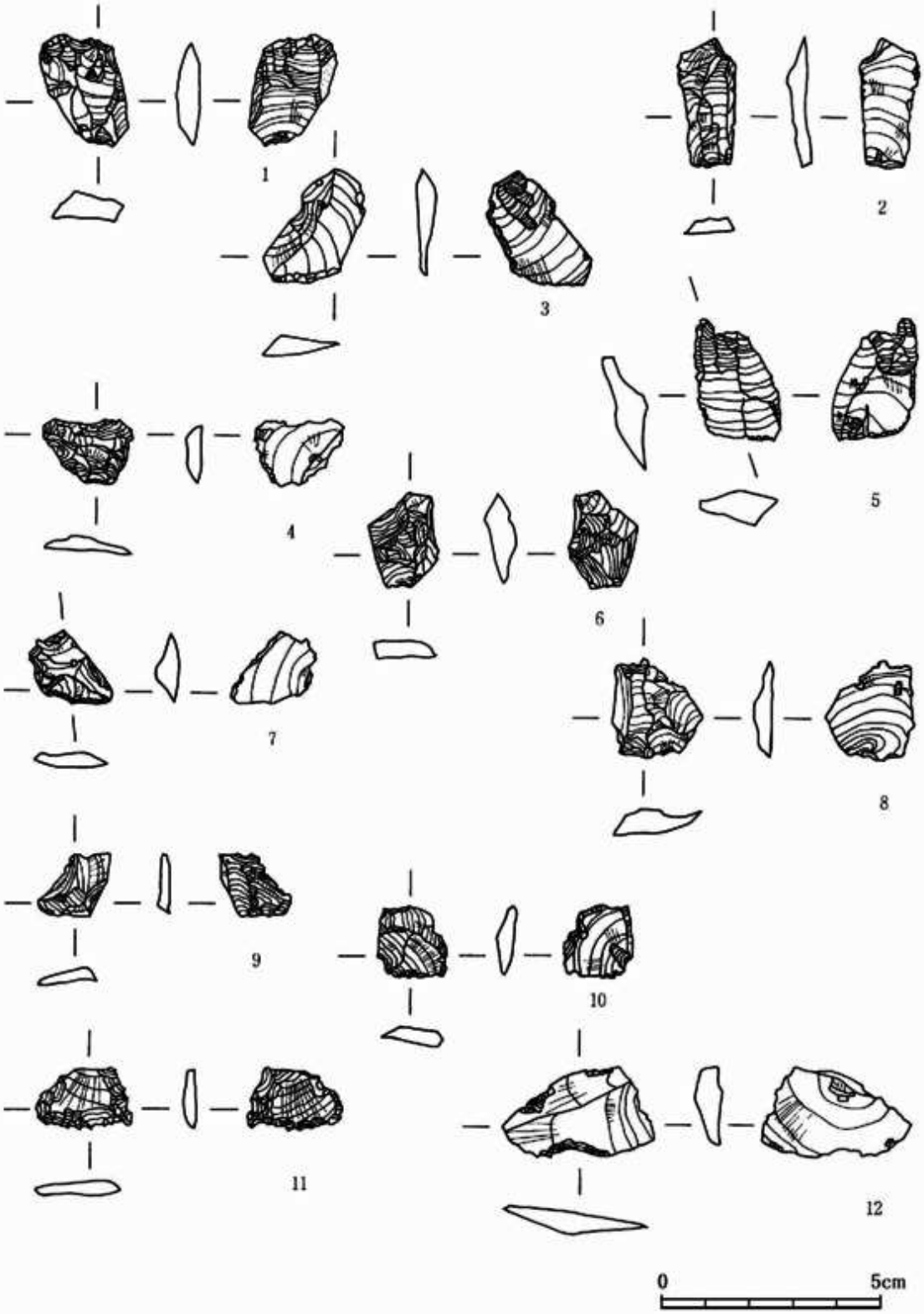
第24図　縄文時代石器実測図（1）



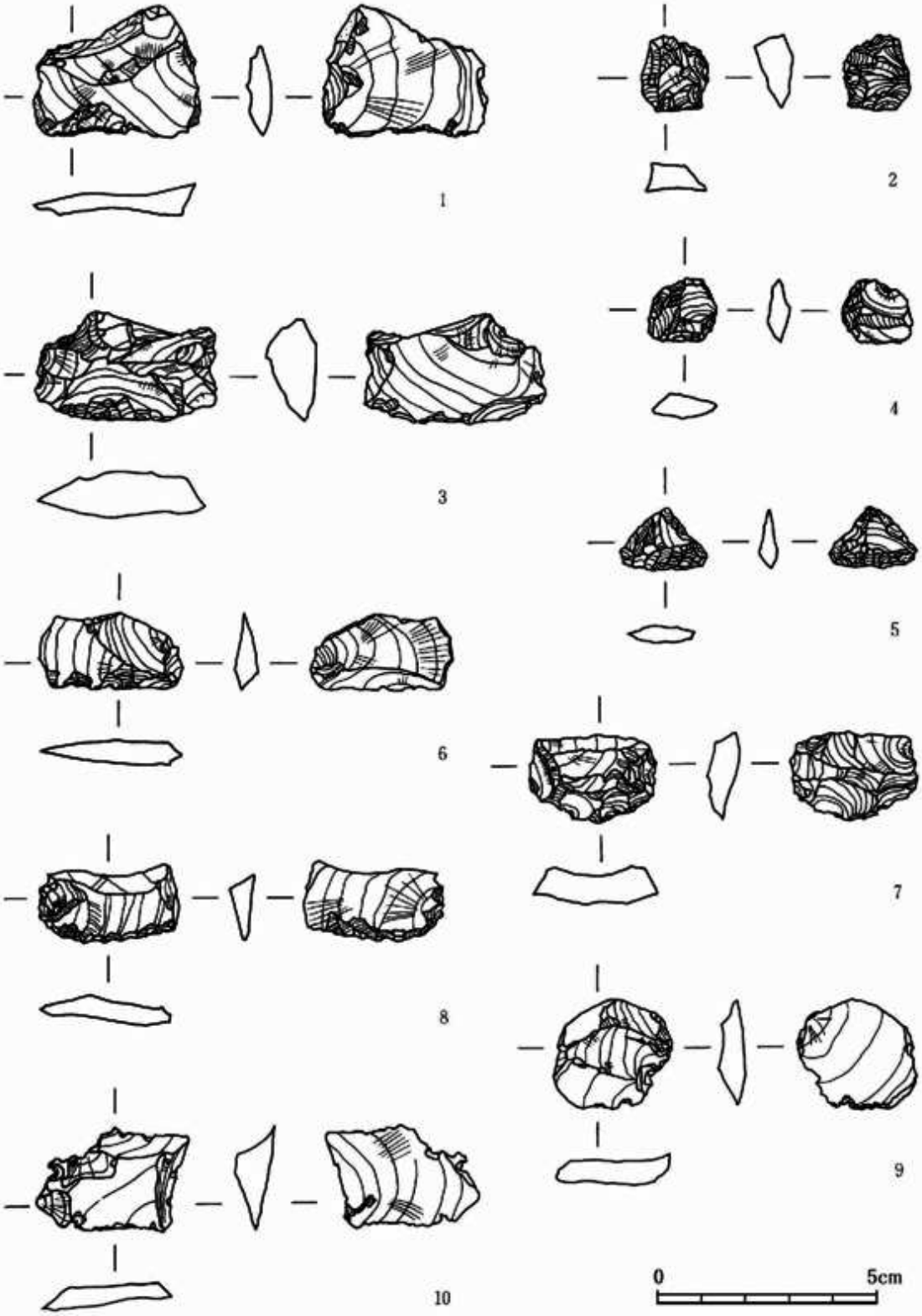
第25図　縄文時代石器実測図 (2)



第26図　縄文時代石器実測図 (3)



第27図　縄文時代石器実測図（4）



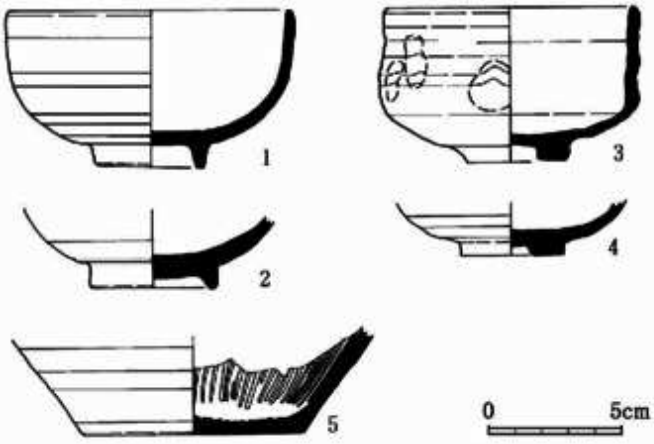
第28図　縄文時代石器実測図 (5)

近世陶器

1・2は共に灰釉の碗である。1は、4分の1程度欠損しているが、口径約10cm、高さ約6cmで、見込み部分から腰部にかけて大きく内弯し、口縁部まで垂直に立ち上がる器形である。底部には削りの痕跡を残している。高台は直径約4cm、高さ約0.8cmであり、比較的薄い。2は底部であるが、見込み部分より内弯して立ち上がる器形で、器壁は約0.4cmほどである。高台は貼り付け高台であり、直径約5cm、高さ約0.8cmを測る。釉薬は器面全体に施されている。これらの陶器は、全面に施釉されているが、この技法は瀬戸産にはみられないことから美濃系の可能性がある。時期は18世紀後半と思われる。

3・4は鉄釉の碗である。3はいわゆる「ゲンコツ茶碗」と呼ばれるもので、ロクロ成形したのちに指によって窪みを意図的に作っている。器形は口径約10cm、高さ約5.5cmで、底部よりややあがり気味にひらき始め、腰部で大きく屈曲して垂直に立ち上がって口縁部にいたっている。高台はケズリ出し高台で、直径約4cm、厚さ約1cm、高さ0.6cmで高台底部以外はすべて施釉されている。また体部には、横位に5条の沈線が施されている。4は底部のみであるが見込みより大きく内弯して口縁部にいたる器形と推定される。高台は直径約4cm、厚さ1cm、高さ0.5cmのケズリ出し高台である。釉薬は高台の内面まで施されている。3・4は共に美濃産と思われ、18世紀後半と考えられる。

5は擂鉢である。底部からひらき気味に立ち上がる器形で、比較的薄手のものである。内面にはクシ状工具で縦にキザミ目を入れ、見込み部は同一工具によって螺旋状にキザミを施している。この擂鉢は東濃系のものと思われ、18世紀以降のものと考えられる。



第29図　陶磁器実測図

第V章　結　　語

今回の調査地区は荒神山おんまわし遺跡の東端部に位置するが、弥生時代の住居址２基、方形周溝墓１基、平安時代の住居址４基等が出土した。

第30号住居址内では口唇部に刻みをもち、体部上半部を外面では縦位・斜位のクシ調整が施され、体部下半部はヘラミガキが施されている。頸部はしまっており、外反ぎみに口縁部が広がっている。この土器とは別個体で同様の土器片も出土している。この土器片にはクシ描波状文が１単位施されている。口唇部には刻みはない。この土器は恒川式Ⅲ～Ⅳ期のものと考えられる。

町内ではこのほかに樋口内城遺跡の第83号住居址内から同様の土器が出土し、弥生時代中期末的な土器が共伴している。

このことから当地方では恒川式Ⅲ～Ⅳ期の土器と橋原式の土器が同時期に存在していたと考えることができる。

次に方形周溝墓についてみると、今回も含めて合計13基の出土をみたが、樋口五反田遺跡でも２基出土している。

荒神山おんまわし遺跡では第３号周溝墓から鉄剣が出土したが、周溝墓内から鉄剣を出した例をみると、弥生時代後期から古墳時代初頭のものが多く、弥生時代中期末葉以降の住居址と共に出土していることも考え合わせると、当遺跡の方形周溝墓もやはり弥生時代後期から古墳時代初頭に該当すると推定される。

次に遺跡の立地条件をみると第Ⅱ章第２節で述べたように広大な低湿地を背景としてこの地域の弥生時代の集落が展開している。

稲作技術は弥生時代中期には既に伊那谷に伝わっていることは豊丘村林里遺跡より出土した遠河川系土器によって明らかであり、樋口五反田遺跡では大陸系磨製石器といわれる扁平片刃石斧をはじめ、太形蛤刃石斧や磨製石庖丁が出土している。また、第16号住居址からは0．3㌘ほどの炭化米が出土しており、弥生時代中期末葉には米作りが町内でも行われていたといえる。

一方荒神山おんまわし遺跡では第１次・２次調査をあわせて４点の石庖丁が出土している。炭化米・籾痕のついた土器等は出土していないものの、やはり米作りが行われていた可能性は高い。

これらの遺跡に対して荒神山西遺跡ではピット内ではあるものの石鍬が出土しており、地形的にも東は荒神山、西は天竜川に面しており、低湿地のない段丘上において陸耕が行われていたことを推察させる。また、低湿地の東側に存在する樋口内城遺跡においては、第５号住居址から炭化麦が出土し、更に有肩片刃石斧や打製石斧の出土もあり、背後に広がる広大な扇状地で陸耕を主として行っていたと考えられる。なおこの遺跡では磨製石鏃が30数点出土している。周辺の遺跡からは磨製石鏃の出土がみられないことから何か特殊な条件があったのかもしれない。

次に平安時代の住居址をみると、４基の住居址が２ヶ所に重なって検出している。しかも第49・50号住居址は柱穴が確認されず、カマドも確認されなかった。

一方第46・47号住居址では四本の柱穴と共にカマドも出土しており、第49・50号住居址と比較しても規模が大きいことから第49・50号住居址は倉庫的な役割をはたしていた可能性も考えられる。

今回の調査は範囲も狭く、遺跡の性格を考えることは難しいが、前回の調査等も含めて詳細に検討を加え、樋口区の遺跡の様相を把握していくことが、今後の大きな課題といえよう。

おわりに、末筆とはなりましたが、発掘調査・遺物整理に直接携わっていただいた皆さんに感謝申し上げます。また、瀬戸市の藤沢良祐氏には近世陶器についてご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

飯田市教育委員会　1986　『恒川遺跡群　遺構・遺物編』
岡田正彦　1977　「平安時代土師器の編年試論」　『信濃』29－9
岡谷市教育委員会　1981　『橋原遺跡』
岡谷市教育委員会　1987　『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』
上伊那誌編纂会編　1962　『長野県上伊那誌』　第一巻　自然編
小平和夫　1987　「伊那谷における様相」『長野県考古学会誌』シンポジウム特集号　55・56号
塩尻市教育委員会　1985　『堂の前・福沢・青木沢』
竹渕修二　1980　「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」　『上伊那教育会郷土館部研究紀要』　第１集
竹渕修二　1981　「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」　『上伊那教育会郷土館部研究紀要』　第２集
竹渕修二　1982　「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」　『上伊那教育会郷土館部研究紀要』　第３集
竹渕修二　1983　「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」　『上伊那教育会郷土館部研究紀要』　第４集
辰野町誌編纂委員会編　1989　「地形地質」　『辰野町誌』　自然編
茅野市教育委員会　1986　『高風呂遺跡』
直井雅尚　1989　「松本平における内黒ロクロ土師器の出現と展開」　『信濃』40－4
仲野泰裕　1986　「浅間山の大噴火（天明三年）に伴う泥流層下の瀬戸美濃陶器」　『愛知県陶磁資料館研究紀要』5
長野県編　1983　『長野県史　考古資料編』　全一巻（四）　遺構遺物
長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４総論編』
楢崎彰一・斎藤孝正　1983　「猿投窯編年の再検討について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』2
楢崎彰一　1983　「猿投窯の編年について」　『愛知県古窯跡分布調査報告書』Ⅲ
原明芳　1988　「松本平における平安時代の食膳具」　『信濃』
前川要　1984　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ
宮田村教育委員会　1990　『中越遺跡』

調査区全景（北より）

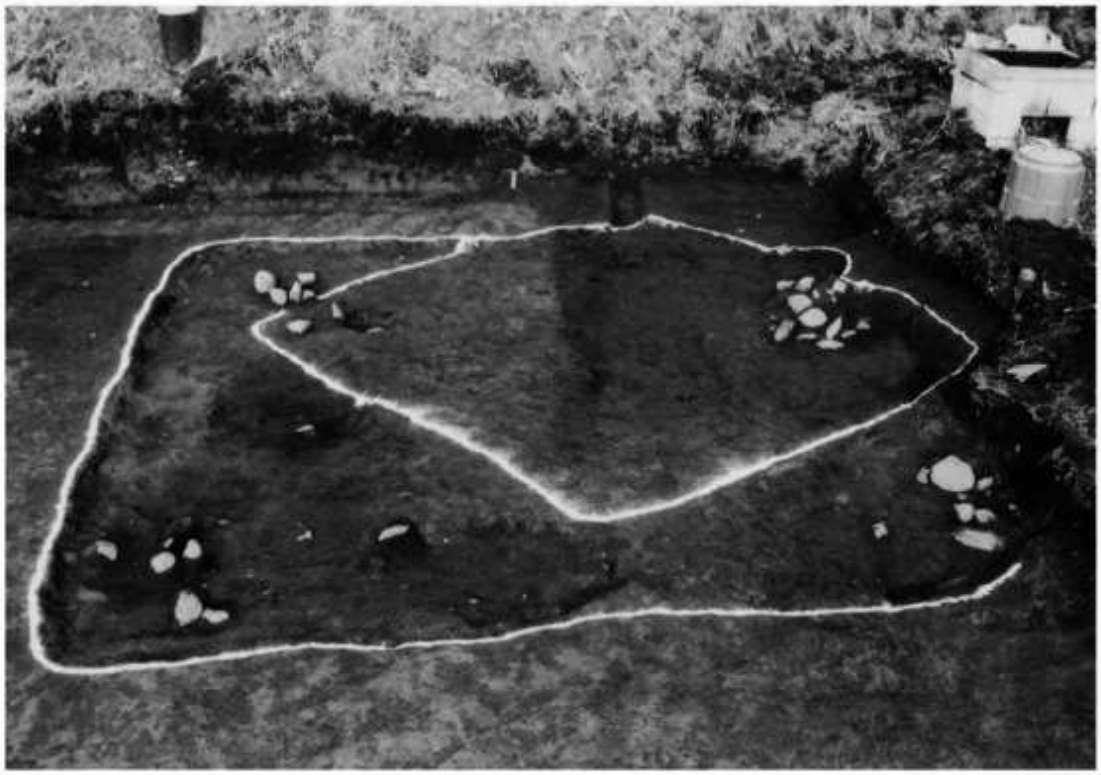
調査区全景（東より）

図版 2

第 30・49・50 号住居址

第 48 号住居址

第 15 号方形周溝墓

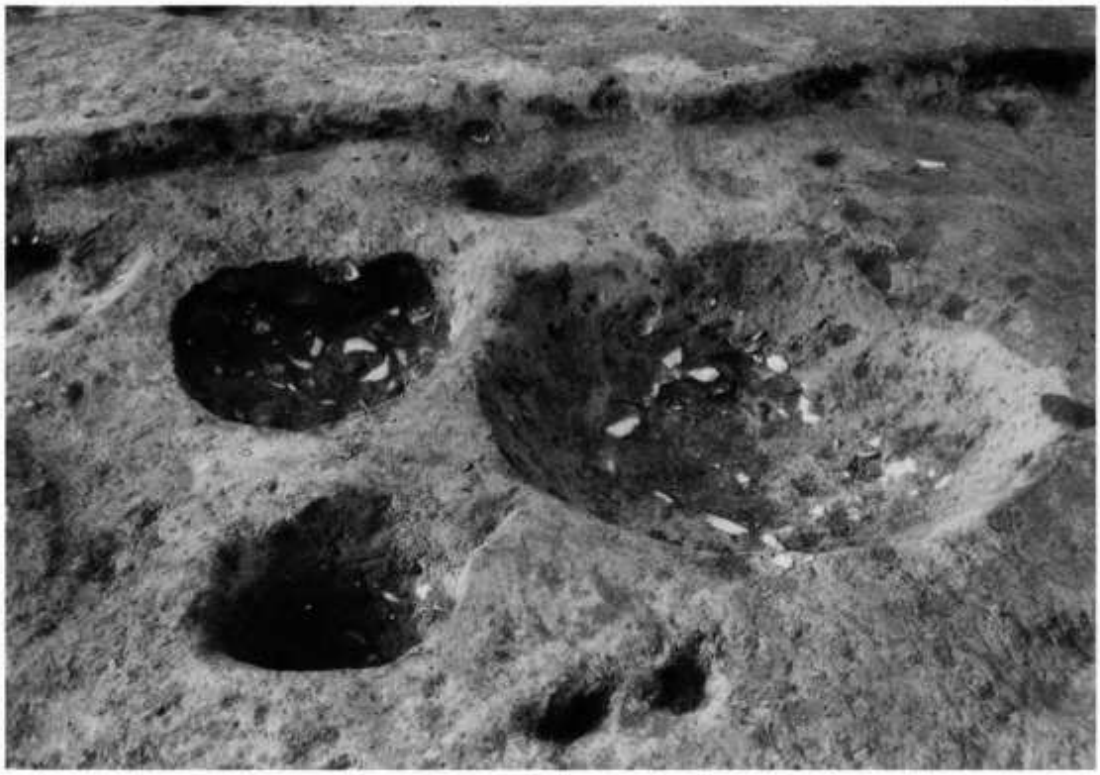


第 46・47 号住居址

図版 4

第 49・50 号住居址

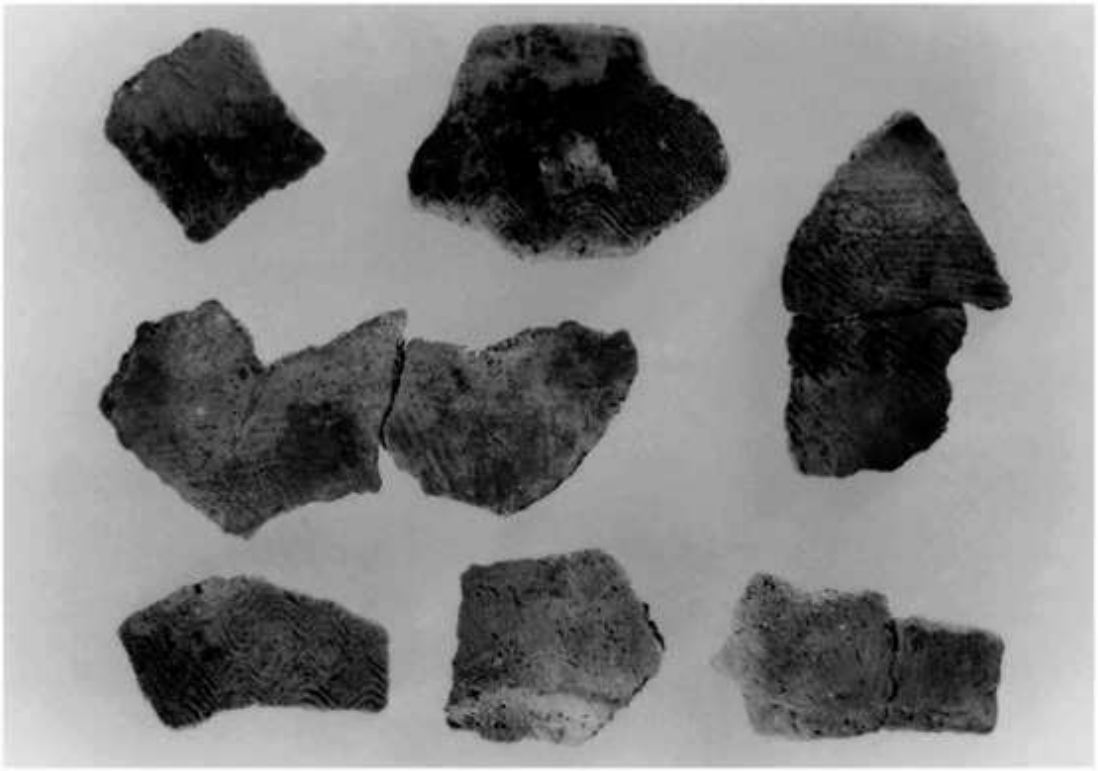
第 1 号溝址



第 7 号土坑

第 5・6 号土坑

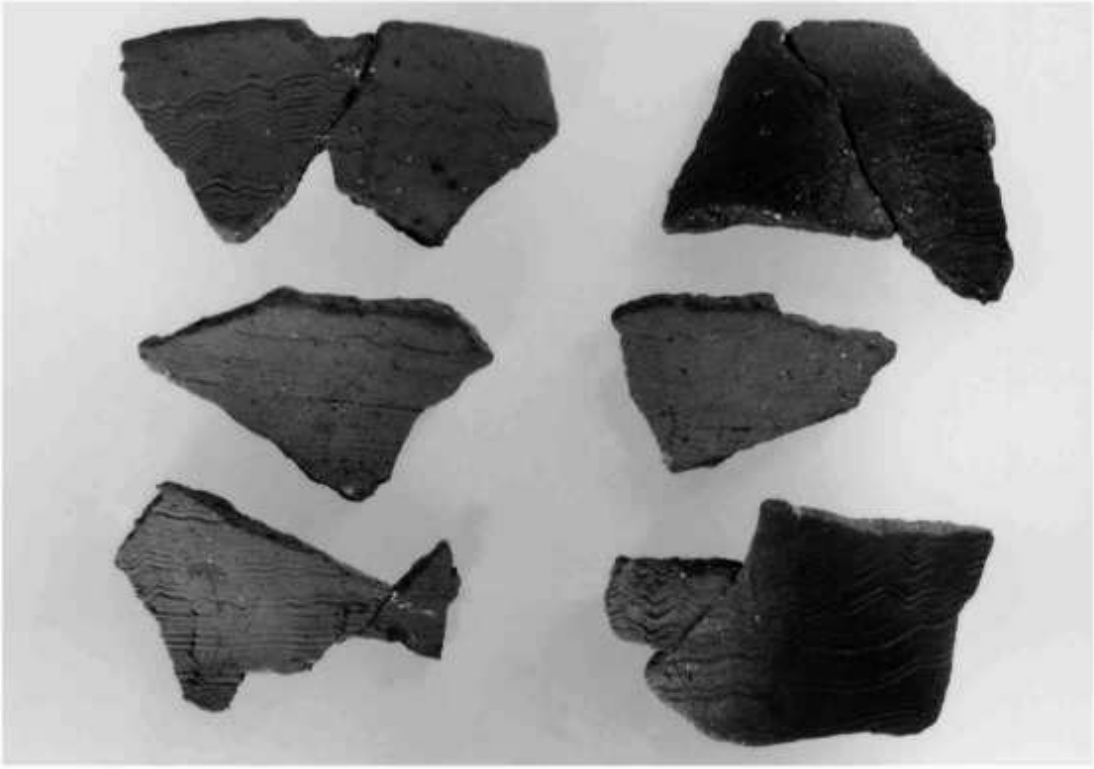
図版 6



第 30 号住居址出土遺物

第 30 号住居址出土遺物

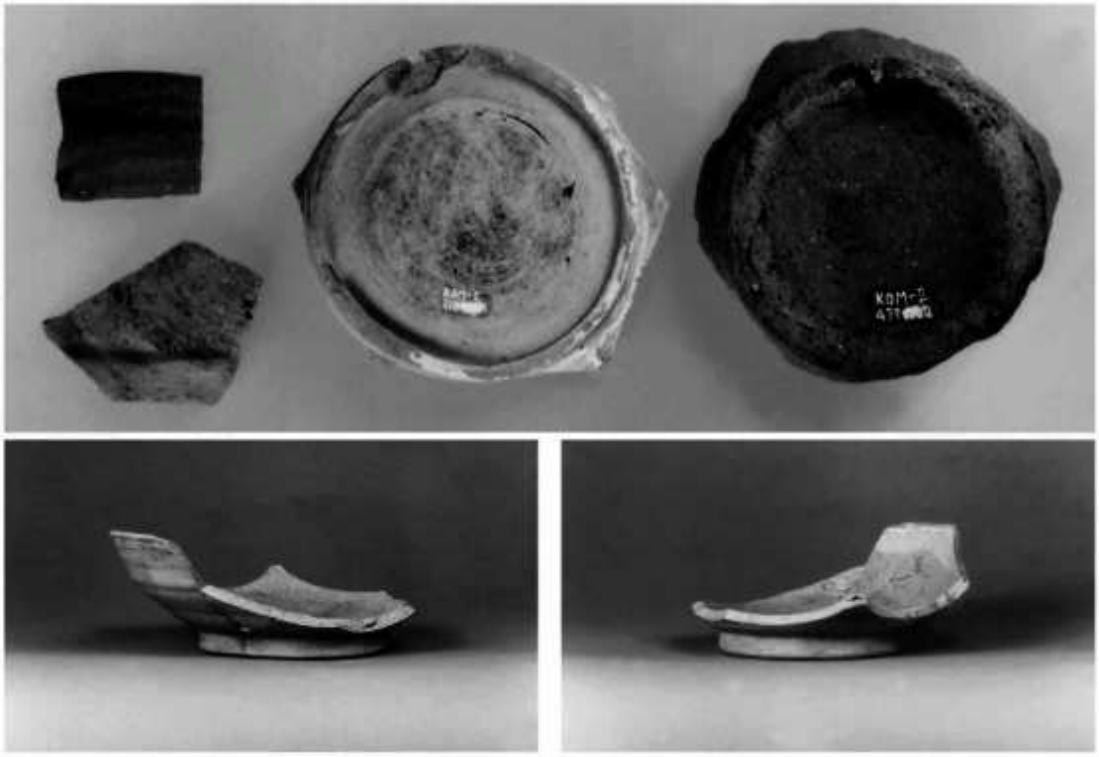
図版 8



第 48 号住居址出土遺物

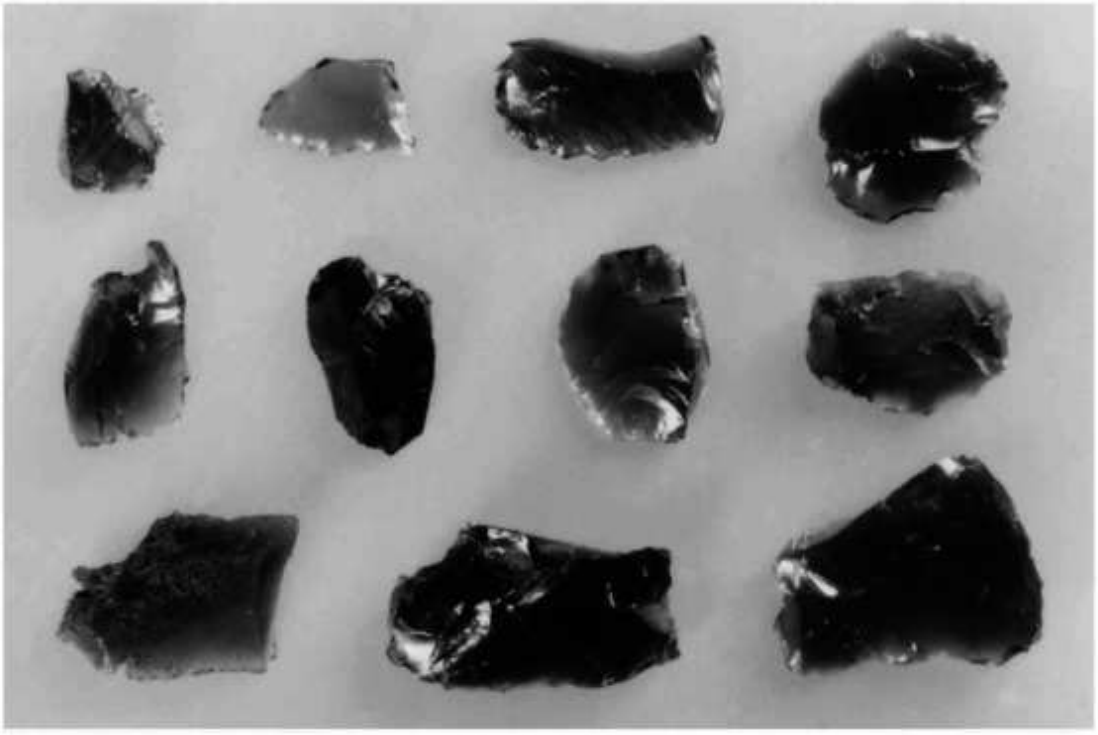
第 49・50 号住居址出土遺物

図版 10



第 46 号住居址出土遺物

遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

図版 12

遺構外出土遺物

荒神山おんまわし遺跡II

緊急地方道整備事業 与地ー辰野線改修事業
に伴う緊急発掘調査報告書

発　行　日　　平成3年3月25日
編集・発行　　辰野町教育委員会
〒399－04
長野県上伊那郡辰野町中央1
☎0266(41)1111㈹
印　刷　所　　精美堂印刷所